

構造番号	検出構造番号	位 置		構造の性質等	時 期	構造の先後関係	備 考
		X	Y				
4.2.7	近壁2	-16783.0	-37712.6	遠心基盤(次)	IRC 前半		
4.2.8	近壁2	-16783.2	-37712.7	柱穴?			
4.2.9	近壁2	-16783.1	-37712.7	柱穴?			
4.3.0	近壁2	-16783.1	-37712.7	柱穴?			
4.3.1	近壁2	-16783.8	-37722.6	柱穴・丸脚?			
4.3.2	近壁2	-16783.0	-37722.6	平面木材			
4.3.3	近壁2	-16783.1	-37712.6	机脚?			
4.3.4	近壁2	-16783.4	-37721.0	丸脚(アリ)			
4.3.5	近壁2	-16783.9	-37712.6	柱穴?			
4.3.6	近壁2	-16782.5	-37722.2	丸脚?			
4.3.7	近壁2	-16782.3	-37722.6	柱穴・机脚?			
4.3.8	近壁2	-16782.0	-37722.9	柱穴?			
4.3.9	近壁2	-16782.0	-37722.9	平面木材			
4.4.0	近壁2	-16782.1	-37722.7	柱穴?			
4.4.1	近壁2	-16781.7	-37721.0	柱穴?			SP302 の一部
4.4.2	近壁2	-16781.0	-37721.0	柱穴?			
4.4.3	近壁2	-16781.2	-37722.0	平面木材			
4.4.4	近壁2	-16783.9	-37722.2	遠心基盤(次)			
4.4.5	近壁2	-16783.1	-37721.2	丸脚			
4.4.6	近壁2	-16783.7	-37722.8	柱穴?			
4.4.7	近壁2	-16781.0	-37719.2	遠心基盤(次)			
4.4.8	近壁2	-16783.9	-37712.6	丸脚(2脚)			
4.4.9	近壁2	-16783.7	-37721.0	丸脚(アリ)			
4.5.0	近壁3	-16781.7	-37712.9	柱穴			
4.5.1	近壁3	-16786.9	-37721.9	柱穴	IRC 前半 → SP303		
4.5.2	近壁3	-16786.2	-37712.9	平面木材	IRC 前半		
4.5.3	近壁3	-16786.2	-37722.0	柱穴・机脚?	IRC 前半		
4.5.4	近壁3	-16784.9	-37722.5	柱穴?	IRC 前半		
4.5.5	近壁3	-16786.8	-37723.3	平面	IRC 前半		
4.5.6	近壁3	-16783.6	-37713.7	柱穴	IRC 前半		
4.5.7	近壁3	-16784.3	-37703.9	柱穴	IRC 前半		
4.5.8							欠番
4.5.9	近壁3	-16783.6	-37721.2	柱穴	IRC 前半		
4.6.0	近壁3	-16780.3	-37723.1	柱穴・丸脚?	IRC 前半		
4.6.1	近壁3	-16780.3	-37721.7	柱穴	IRC 前半		
4.6.2							柱頭
4.6.3	近壁3	-16785.1	-37706.6	柱穴	IRC 前半		
4.6.4	近壁3	-16785.1	-37701.5	柱穴	IRC 前半		
4.6.5	近壁3	-16780.0	-37706.6	柱穴	IRC 前半		
4.6.6	近壁3	-16784.7	-37701.5	柱穴	IRC 前半		
4.6.7	近壁3	-16785.3	-37702.6	柱穴?	IRC 前半		
4.6.8	近壁3	-16785.3	-37702.2	柱穴?	IRC 前半		
4.6.9	近壁3	-16784.6	-37704.8	柱穴?	IRC 前半		
4.7.0	近壁3	-16780.1	-37705.5	床板(追跡)	IRC 前半		
4.7.1	古代	-16765.0	-37708.0	床板(追跡)	IRC 前半?		
4.7.2	古代	-16762.5	-37708.0	床板(追跡)	IRC 前半?		
4.7.3	古代	-16761.3	-37712.9	床板(追跡)	IRC 前半?		
4.7.4	古代	-16760.0	-37712.9	床板(追跡)	IRC 前半?		
4.7.5	寄生・古墳	-16760.0	-37722.5	床板(追跡)	IRC 前半?		
4.7.6	寄生・古墳	-16761.5	-37712.9	床板(追跡)	IRC 前半?		
4.7.7	寄生・古墳	-16761.5	-37722.5	床板(追跡)	IRC 前半?		
4.7.8	寄生・古墳	-16761.5	-37723.0	床板(追跡)	IRC 前半?		
4.7.9	寄生・古墳	-16762.5	-37722.0	床板(追跡)	IRC 前半?		
4.8.0	寄生・古墳	-16762.5	-37725.8	床板(追跡)	IRC 前半?		
4.8.1	寄生・古墳	-16764.0	-37721.5	床板(追跡)	IRC 前半?		
4.8.2	寄生・古墳	-16764.0	-37723.0	床板(追跡)	IRC 前半?		
4.8.3	寄生・古墳	-16764.8	-37723.0	床板(追跡)	IRC 前半?		
4.8.4	寄生・古墳	-16764.2	-37726.4	床板(追跡)	IRC 前半?		
4.8.5	寄生・古墳	-16760.6	-37705.8	天井上戸板	寄生・古墳		
4.8.6	寄生・古墳	-16760.8	-37707.1	天井上戸板	寄生・古墳		
4.8.7	寄生・古墳	-16760.6	-37708.3	天井上戸板	寄生・古墳		
4.8.8	寄生・古墳	-16761.5	-37706.5	天井上戸板	寄生・古墳		
4.8.9	寄生・古墳	-16761.7	-37706.5	天井上戸板	寄生・古墳		
4.8.0	寄生・古墳	-16761.8	-37704.7	天井上戸板	寄生・古墳?		
4.8.1	寄生・古墳	-16763.1	-37704.7	天井上戸板	寄生・古墳		
4.8.2	寄生・古墳	-16762.4	-37704.7	天井上戸板	寄生・古墳?		
4.8.3	寄生・古墳	-16761.2	-37704.7	天井上戸板	寄生・古墳?		
4.8.4	寄生・古墳	-16761.5	-37701.0	天井上戸板	寄生・古墳?		
4.8.5	寄生・古墳	-16765.0	-37702.0	天井上戸板	寄生・古墳?		
4.8.6	寄生・古墳	-16763.0	-37702.5	天井上戸板	寄生・古墳?		
4.8.7	寄生・古墳	-16763.0	-37702.5	天井上戸板	寄生・古墳?		
4.8.8	寄生・古墳	-16762.0	-37701.7	天井上戸板	寄生・古墳?		
4.8.9	寄生・古墳	-16761.8	-37701.7	天井上戸板	寄生・古墳?		
4.9.0	寄生・古墳	-16761.8	-37702.6	天井上戸板	寄生・古墳?		
4.9.1	寄生・古墳	-16763.0	-37702.9	天井上戸板	寄生・古墳?		
4.9.2	寄生・古墳	-16762.5	-37702.9	天井上戸板	寄生・古墳?		
4.9.3	寄生・古墳	-16761.5	-37702.9	天井上戸板	寄生・古墳?		
4.9.4	寄生・古墳	-16764.3	-37709.2	天井上戸板	寄生・古墳?		
4.9.5	寄生・古墳	-16764.5	-37723.1	天井上戸板	寄生・古墳?		
4.9.6	寄生・古墳	-16764.5	-37723.1	天井上戸板	寄生・古墳?		
4.9.7	寄生・古墳	-16764.2	-37723.1	天井上戸板	寄生・古墳?		
4.9.8	寄生・古墳	-16764.0	-37723.1	天井上戸板	寄生・古墳?		
4.9.9	寄生・古墳	-16764.0	-37706.6	天井上戸板	寄生・古墳?		
5.0.0	寄生・古墳	-16763.5	-37706.6	天井上戸板	寄生・古墳?		
5.0.1	寄生・古墳	-16764.0	-37702.9	天井上戸板	寄生・古墳?		
5.0.2	寄生・古墳	-16764.3	-37709.2	天井上戸板	寄生・古墳?		
5.0.3	寄生・古墳	-16764.5	-37723.1	天井上戸板	寄生・古墳?		
5.0.4	寄生・古墳	-16764.2	-37723.1	天井上戸板	寄生・古墳?		

※3. ガガシッタのものについては記述しているもの。

第5章　まとめ

1　岡山藩藩学の変遷と検出遺構

藩学の諸施設とその変遷⁽¹⁾

岡山藩藩学は寛文9年(1669)、全国に先駆け開校する。藩学の運営に際しては、寛文7年(1667)に鹿寺とされた円乗院の敷地に加え、17軒の武家屋敷を移転させている。藩学は南北120間、東西61間の広大な規模で、施設、制度とも岡山藩主池田光政の宗教、教育観を色濃く反映したものとなっている。藩学の諸施設は店の学制や周の領官の割に倣ったもので、南の外門から、洋池、左右に「右塾」「左塾」を設けた校門、講堂、中室、食堂、輔仁軒が一直線に並ぶ。講堂などの建物群を中心として、東側に菊舎、蘭舎、梅舎、橘舎、椿舎の文学場五舎、西側に松舎、竹舎、柳舎、槐舎、杉舎の演武場五舎を東西対象に設け、それぞれの学舎前には学舎の名にちなんだ植物が植えられた。右塾、左塾には番所が置かれ、生徒の出席確認などが行われ、講堂は講習及び儀式の場であった。中室は聖廟に相当し、中江藤樹筆の周文宣王の図像が掛けられたという。食堂は食事の場としてだけでなく、小侍者(庶民の子弟)の習字・習礼などに利用された。また、学舎の西側、外堀土塁に沿った位置に馬場、松舎の前に射場が設けられていた。

高い理想と先進的な制度をもって開校した藩学であるが、藩財政の逼迫と幕府の圧力もあり光政の跡を継いだ岡山藩主池田綱政の代には縮小していくこととなる。

延宝3年(1675)には2000石の学校額が500石に減らされ、不用の学房を廃止、貞享3年(1686)から元禄元年(1688)にかけては輔仁軒などの諸施設などの諸施設が廃止されている。また、宝永6年(1709)には学内の桃舎、橘舎、椿舎、槐舎の五学舎の取り壊しが決まったが、学校奉行市浦清七郎の懇意により撤回されたという。以降は幕末までほぼこの規模であったという。

その後、宝暦から天明年間(1751～1788)には、藩主第四代宗政、第五代治政ら⁽²⁾の督励、当時の武芸や学問奨励の時代背景もあり再び隆盛する。宗政、治政らは宝曆11年(1761)には学校額を1000石に増加、明和6年(1769)には学校興隆策を明らかにし教育制度も改めるなど藩学の復興に力を注いだ。しかし、江戸中期以降の藩学は、教授内容は初等教育に限られ、学問的にも保守的であり、さらに学問を求めるものは城下の私塾に通わねばならない状況であったという。

藩学関係絵図とその変化

岡山藩藩学については岡山大学付属図書館の池田家文庫を中心に絵図類が残されている。これらには校内の諸施設を描いたものと、講堂などで行われた儀式や祭典の際の次第や席次などを記入したものなどがある。校内全体を示した絵図は数種頃残されているが、年号などの記されたものは少ない。しかしながら、絵図の中には元の建物等に張り紙をし、その上から新しい建物などを書き直したものなどがあり、それらを手がかりにおおよその絵図の順序と施設の変遷を追うことができる。主な絵図を下に挙げる。

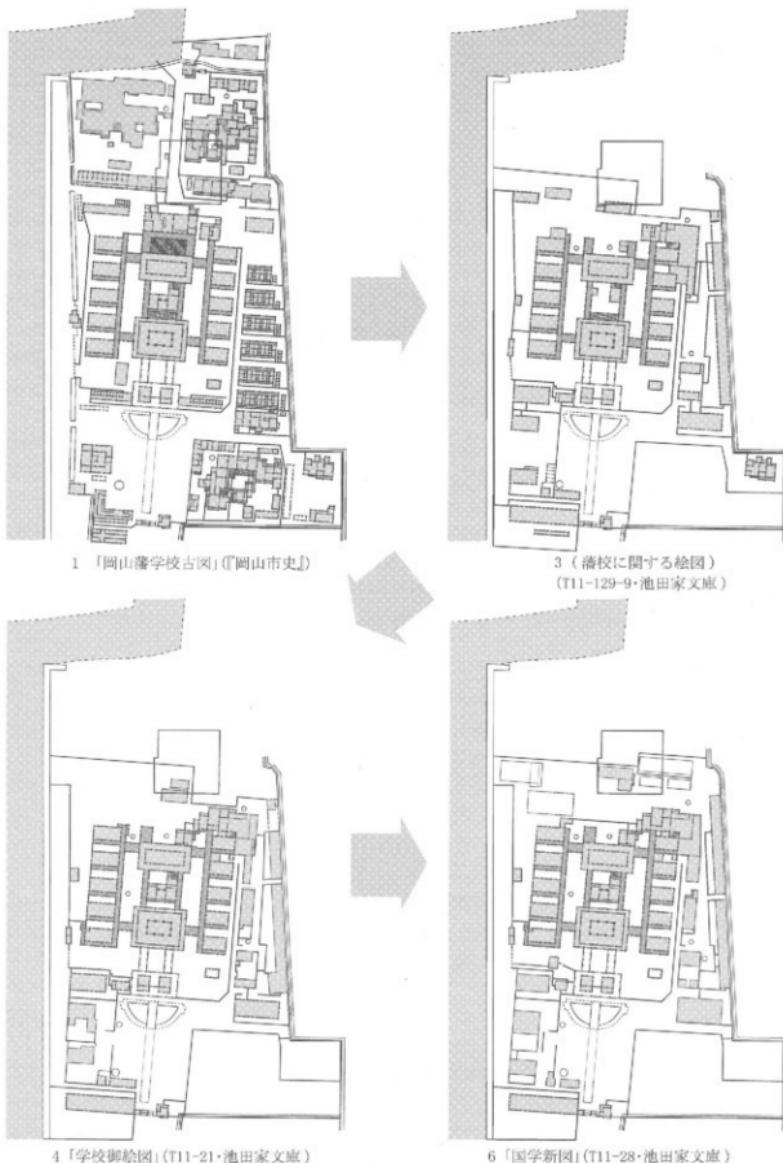
1. 「岡山藩学校古図」(『岡山市史 宗教教育編』掲載、所在不明)

寛文期のものとされる。藩学南東部と北側に学校奉行の屋敷も詳細に記入。輔仁軒なども当初の規模とみられ、縮小以前の状況を示す。

2. 「(藩校に関する絵図)」(T11-129-8・岡山大学付属図書館蔵)

建物配置は1とほぼ同じ。外郭線などを張り紙で修正しており、下書き的な表現の絵図である。北側

1 岡山藩藩学の変遷と検出遺構



第190図 岡山藩藩学絵図の変遷

の屋敷地内には建物が記入されていない。

3. 「(藩校に関する絵図)」(T11-129-9・岡山大学付属図書館蔵)

張り紙の下に1と同じ建物を記載している。藩学東側の学房群、輔仁軒、北側の吏舎などに張り紙し、別の構造の建物を描いている。南北の学校奉行屋敷にも張り紙し、隠している。

4. 「学校御絵図」(T11-21・岡山大学付属図書館蔵)

3とは藩学北側の廻、東側の建物群などに若干の違いがある。学舎前に植えられた植物なども表現しており非常に美麗な絵図。同じものに林原美術館蔵品がある。「(藩校に関する絵図)」(T11-129-2・岡山大学付属図書館蔵)もこれとほぼ同じ建物配置で、下書き風。4、5では廻と表記されている藩学北部の建物が「学寮」と記されているなど若干の違いがある。

5. 「備前学校図」(KM110/20・岡山県立図書館蔵)

伊丹惟虎が文政2年(1819)に描いたもの。建物配置は3に近く、古い絵図を写した物である可能性がある。絵図の周囲に施設の使用状況などを記載する。

6. 「国学新図」(T11-28・岡山大学付属図書館蔵)

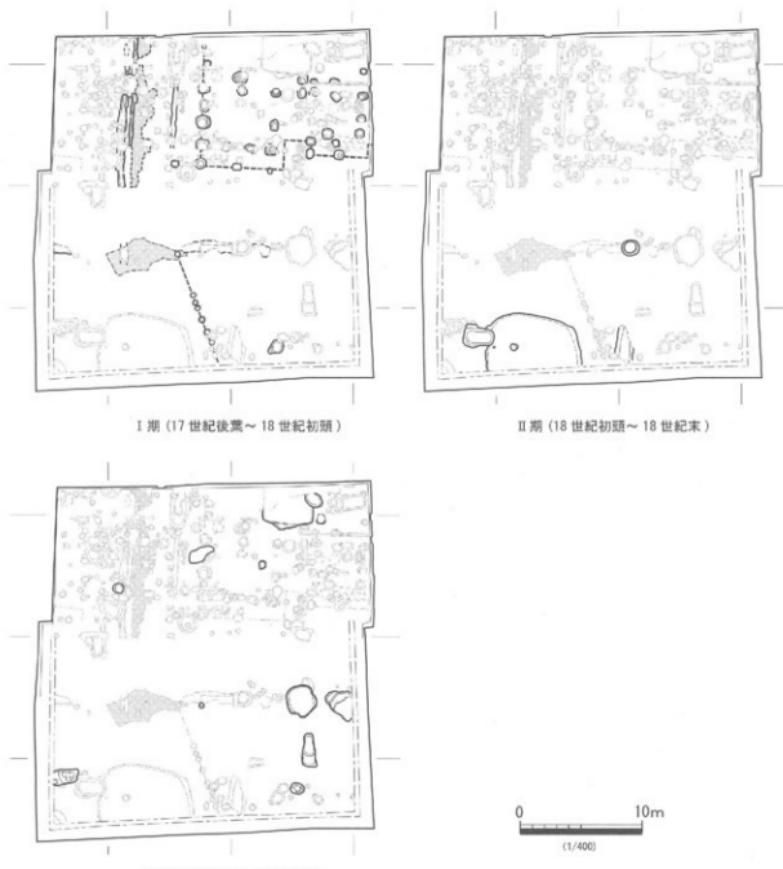
嘉永6年(1853)の記載。4とは藩学北限やその周囲の建物、藩学東側の建物群に違い。

これら以外では、岡山県立博物館蔵の「備前国岡山州学之図」が延宝元年(1673)～貞享元年(1684)頃のものとされる。建物等は1に近い配置をとり、周囲に藩学の東西南北の規模が記載されているが、表現がかなり簡略化されており、南北の学校奉行屋敷に泉八右衛門、加瀬八兵衛、熊沢三太郎らの名を記す。泉八右衛門には「了介弟」と付記され、熊沢三太郎は「了介子 蕃山三太郎」と記載されており、公的な絵図とは考えにくい。かつての藩学を顕彰するために後世に描かれたものともいわれる⁽³⁾。

さて、これらの絵図の内、1、2、3には年号などの記載がなく、描かれた時期を特定できない。1、2は藩学の外郭を北側の外堀や土塁が屈曲する部分まで描いており、南北120間とも言われる縮小以前の姿を表しているとみてよいだろう。なお、松舎前に寛文10年(1670)に完成した射場の記載がありそれ以降のものと思われる。また、3は輔仁軒や東側の学房部分に張り紙をして書き直しており、輔仁軒、称徳亭、範馳軒、浴室のほか学房を残らず毀したとされる貞享3年(1686)から元禄元年(1688)の状況とよく一致している。また、『岡山市史』第三の文献抄に「宝永元年甲申四月十六日、学校地内を割き主膳殿の邸を設けらるる・・・」と引用されており⁽⁴⁾、宝永5年(1708)かとされる「岡山内曲輪絵図」(T6-20・岡山大学付属図書館蔵)では、藩学北側の東西に並んだ屋敷地⁽⁵⁾の上に張り紙をし、「池田主膳殿御屋敷」と記載している。3の屋敷部分に張り紙をしていることも合わせ、元々学校施設として扱われていた学校奉行の屋敷も、貞享から宝永の縮小時にほかの士分の屋敷と同じ扱いとされ、さらに整理縮小されていく状況を示していると思われる。

4は東側の建物の配置から、『岡山市史』第三に引用された「安永九年庚子四月十九日、東長屋の西に長屋を新築し…」の記事、安永9年(1780)以降のものと見られる。十八世紀後半以降、宝曆2年(1752)には広島藩、宝曆8年(1758)には彦根藩、文化10年(1813)には伊予松山藩から藩学の状況について問い合わせがあり、絵図を付けて回答している。また、他藩の家臣や近隣都市の医者、町人などの親校も多かったという。こうした藩学への関心の高まりの中で作られた絵図であるのかもしれない。

6は嘉永6年(1853)の記載があり、藩学の江戸期最後の段階のものと見られる。ただし、明治以降の印刷物である「旧岡山藩学校之図」(KM110/21・岡山県立図書館蔵)では、北限の境界線やその付近にある建物は4と共にしているのに対し、梧舎周辺の建物、藩学北西角付近の建物などは6のものに共通している。また、文久元年(1861)の城下図「備前岡山地理家宅一枚図」(T6-32・岡山大学付属図書館蔵)の藩学北限の表現も4のものに近い。『岡山市史』第三には元治元年(1864)11月13日「弓之町西ノ町金谷廣太郎邸宅の地を学校に付す」との記事がある。「備前岡山地理家宅一枚図」(T6-32)では、金谷廣太郎は



第191図 検出遺構の変遷（近世遺構面1・2）(1/400)

藩学北東角の屋敷地に記載がある。従って、この図の状況が実際に実現したのであれば、元治元年(1864)以降ということになる。なお、明治以降の図が何に基づいて描かれたものかは分からぬが、6は計画図のようなもので実際には実施されなかつた部分もある可能性もある。

以上の絵図類に基づいて、その変遷と調査区の位置を示したのが第190図である。なお、この図は泮池の位置や区画整理前の街路の状況から復元的に描いており、建物の向きや藩学外郭線の形態などが若干元の絵図と異なっていることを付記しておく。

検出遺構の変遷と藩学

第2次調査区近世遺構面1・2の検出遺構は、時期を限定できる遺構は決して多くないが、出土遺物、以降の先後関係、絵図との対比などからI期(十七世紀後葉～十八世紀初頭)、II期(十八世紀初頭

～十八世紀末)、Ⅲ期(十八世紀末～十九世紀代)の三期に分けることができる(第191図)。

I期は出土遺物はほとんどないが、遺構の先後関係では常により新しい遺構に切られる関係にあり、遺構面の中では古い遺構群にある。検出遺構には礎石建物1、礫敷き道路遺構、SX270、SP299ほかの柱穴列などがあり、1の絵図の状況と非常によく合致している。貞享から宝永年間に藩学が縮小される以前の遺構と考えられる。

II期は出土遺物から判断したものがほとんどである。出土遺物としては肥前染付磁器では見込に五弁花文を持つ皿、口縁部内面に四方博文を持つ碗が目立つ。検出遺構にはSP251、SE255、SD266、SP309などがある。絵図では3、4が対応するものと思われる。SE255は掘方の直径約8m、深さ約5mを測る大形の石組み井戸だが、いずれの絵図にも記されていない。極めて規模が大きいことや後述する名札や付け札が出土することから藩学内の井戸であることは疑いない。SP309は桶を埋めたものであり便槽とみられる。4の絵図では、藩学北側に二棟並ぶ建物のうち南のものが廻と記載されており、これに関係するものの可能性が高い。また、SD266は報告していない性格不明の溝状遺構だが、絵図の藩学北限の境界が南北方向に折れる部分に関係する遺構の可能性がある。

III期は出土遺物としてはキラコを塗布した瓦類、肥前染付磁器の端反形碗、広東形碗、関西系の播鉢、瀬戸産馬の目皿が目立つ。焜炉類や土瓶、行平鍋が多量に伴う遺構も目立つ。検出遺構としてはSE064、SP250、SP283、SP284、SP290、SP294などがある。絵図では4、6が対応する。SP250はゴミの廃棄土坑であり、名札や付け札が出土することから藩学内のものである可能性が高い。SP283、SP284、SP290、SP294などは、6の絵図の評価とも関係するが、藩学に隣接する武家屋敷に伴うものである可能性もあるが、SP283ではスナメリの骨格が出土するなど、武家屋敷地内の廃棄土坑とは考えにくい。

第2次調査区は藩学でも最も北側の部分にあたっており、藩学の縮小などに伴いその境界も変化する部分である。検出された遺構が少なく、廃棄土坑などに限られることは校舎基礎により失われた部分も多いが、もとより中核施設の背後の空間にあたることも関係するものと見られる。なお、第4章3節の小結では、鍋、釜の類が少ないことを挙げ、藩学が基本的に生活空間ではないことに由来すると考えた。とはいえ、藩学には厨や食堂が備わっており、小侍者と呼ばれる学校に居住し通役を行いながら習業をする庶民の子弟や学生の内には学房に居住していたものもあった。しかし、小侍者は延宝3年(1675)には藩の財政的理由で大半が退校させられ、さらに貞享年間以降の藩学の縮小に伴い学房の大半が取り壊されてしまっている。その後も学内居住者は存在したようである。なお、Ⅲ期には藩校内の廃棄土坑の可能性が高いSP250でも、炮烙や土瓶、行平鍋などの出土が目立つ。このことは十九世紀以降こうした学内居住者が再び増加するのかもしれない。

注

- (1)岡山藩藩学に関する記録類としては岡山大学附属図書館蔵の池田家文庫に『備蓄国学記録』などの文書群があるが、ここではそれらに基づいて構成された『岡山市史』(岡山市史編纂委員会編、1968『岡山市史』宗教・教育編・岡山市)や『岡山県史』(倉地克直、1985「第五章第一節 学問と諸芸能」岡山県史編纂委員会編『岡山県史』近世II・岡山県)などの記述を参考とした。
- (2)岡山藩池田氏の代の表現は、池田光政を第一代としている。
- (3)倉地克直氏(岡山大学教授)のご教示による。
- (4)藏知 駿・小林久磨雄編 1937『岡山市史』第三 岡山市役所。なお、『備蓄国学記録』を引用したものと見られる。
- (5)振り紙下の東側の敷地には当時学校奉行を務めていた市浦清七郎の名が見える。なお、藩学南側の屋敷地に張り紙し市浦清七郎の名を書き加えている。

2 SP250・SE255 出土の名札、付け札について

近世遺構面 1・2 で検出した遺構の内、SP250からは6点(第103図52～57)、SE255から2点(第114図11～12)の文字の書かれた木札が出土している。遺構の概要是報告(第4章)に譲るとして、これらについて若干見ておきたい。

名札について

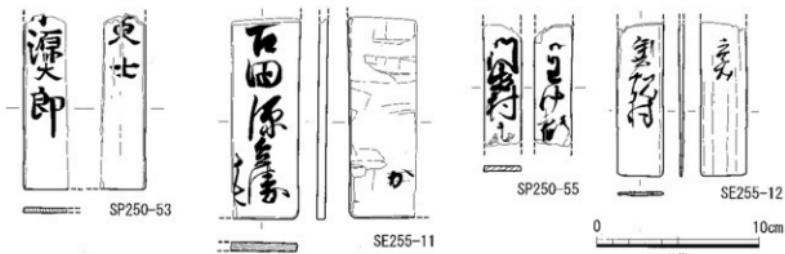
SP250出土の木札のうち53は「源大郎」と人名と見られる文字が読み取れる。SE255では11の木札に「古田源兵衛」の姓名と年齢とみられる「十七」の文字が読める。これらの木札はほかのものに比べ厚手で、文字の書体もしっかりとしたものである。SP250-52も文字は判別できないが、同様の木札である可能性がある。またSP250-54も「衛門」の可能性があるが定かではない。藩学には、小生(元服前の学生)、大生(元服後の学生)のほか、学校奉行、講官、授読師、武芸之師、習字師、座奉行、小侍者、小侍者引廻、学厨師以下事務官らがいたが、SE255-11に見える「十七」が年齢を示すものだとすれば、学生の名を記したものである可能性が高い。ここで注意されるのが藩学学生の通学方法である。

藩学校門内の内塾(右塾、左塾)には番所が置かれており、小侍者引廻が小侍者を従えて詰めており、通学者はここで太刀を預け、名札(木札)を受け取り、下校時には名札を返却するしきみであった。名札は学生の出席を示すとともに、文芸、武芸などの修学希望を表示するものでもあった。以下に『岡山市史 宗教教育編』に転載されている延宝元年(1673)12月16日の法式を引用する⁽¹⁾。

以御意相定法式如左

- 一、元服之諸生は半日之日如常四時分御摘下様に出校可有事。
- 一、文武之芸望次第に内塾にて札請取、芸舎に懸け可被申候。読書望之方は札を札場に懸け可被申候。一日之内に文芸武芸二道望之方は札二枚御請取可有候。武芸二道は御無用之事。
- 一、四ツ遍候得は内塾に有之札を引申候間、被出候方は講釈開計にて、芸舎之■は成不申候。
- 一、退出は何時にても心次第に候間、最前懸け被申候芸舎之札、内塾へ御返し退出可有之事。
- 一、出校並呈帰、内塾にて書留可申事。
- 一、座奉行中壇人宛毎舎見廻可被申事。
- 一、馬稽古冬は内塾にて札請取、札場に懸け可被申候。夏は朝より直に範馳え被參、飯台■にて講釈聽聞可有事。

以上のように藩学では、出席管理、修学希望の意思表示などに名札が使用されており、SP250-53、SE255-11はこうした名札の可能性がある。これらの名の人物が、札が廃棄された前後に学生であったのか、ほかの人物であったか判別する手段はなく、またこれらの名札は現存するものがないため、比



第192図 SP250・SE255 出土の名札・付け札 (1/3)

較検討することもできない。そのため断定することはできないが、今後の調査で類例が増加すればさらに検討を加えることも可能であろう。

付け札について

次に、SP250-55、SE255-12は「門出村」などの地名が書かれており付け札の類とみられる。SP250-55の「門出村」は、報告でも触れているが、和気郡門出村(現・備前市)と考えられる。門出村は文化年間(1804~1817)の「岡山藩領手録」によると、直高132石余りで御学校領である⁽¹⁾。SE255-12は「真弘村」⁽²⁾などと読めるが定かでない。場所を特定できないが、「村」の表記から同様の木札と考えられる。なお、『岡山市史』第三には学校知行所として次の十ヶ村が挙げられている⁽³⁾。

神根村、門出村、山津田村、小板屋村、葛籠村、働村、和意谷村、樅村、木谷村、友延村

いずれも備前東部の旧和気郡(現・備前市、和気町)に属する村々である。延宝元年(1673)には、木谷村を開谷領に、延宝2年(1674)には和意谷村が池田家和意谷墓所領となり、その替地として御野郡奥坂村(現・岡山市)の一部が学校領となっている。

いずれにしても、これらの木札は学校領からもたらされる物資に取り付けられていた付け札とみられ、出土した遺構と藩学との関連性を示す重要な証拠のひとつといえる。

なお、木札類の墨書の判読、藩学における名札の使用、付け札の村名等については、元岡山県立博物館館長 加原耕作氏のご教示を得た。

注

(1) 岡山市史編集委員会編 1968『岡山市史』宗教・教育編 岡山市、P357

(2) 藤井 琴ほか 1988『岡山県の地名』日本歴史地名大系34 平凡社。原典の「岡山藩領手録」は個人蔵

(3) 『岡山県の地名』(注(2)文献)などでは「真弘村」は確認できなかった。なお、SE255-12の運筆の状況から、上の十一ヶ村の中では葛籠村が奥坂村が近いようにも思われるが、確証はない。

(4) 藏知 矢・小林久磨雄編 1937『岡山市史』第三 岡山市役所

第6章 史跡旧岡山藩藩学跡泮池について

旧岡山藩藩学跡は、南門、正門(右塾・左塾)、講堂が残っていた大正11年3月8日付けで、国の史跡に指定された。史跡指定地は岡山市西中山下四九番地一、二町二段四畝一四歩五勾のうち789.71坪(約2,606m²)となっており、正門から講堂までを囲む長方形の範囲となっている。しかし、昭和20年6月の岡山大空襲により、これらの建物群を焼失、さらに戦災復興の区画整理事業により史跡指定範囲がわからない状態となっている。指定面積や当時の建物等の状況から、指定範囲は市立岡山中央中学校グラウンドや市道となっている部分に及んでいるようである。現在、泮池のみが往事を窺わせる遺構として残るのみであり、わずかにその周辺の660m²程が旧岡山藩藩学跡として公園となっている。この範囲は岡山師範学校女子部の校内であったため、戦後師範学校を受け継いだ岡山大学の土地となり、現在は岡山市の土地として教育委員会が所管している。なお、以降この範囲を藩学跡と呼称する。

今回、発掘調査により初めて岡山藩藩学関係の遺構が確認されたこともあり、これまで詳細な測量、実測の行われてこなかった旧岡山藩藩学跡泮池の測量調査を実施することとした。

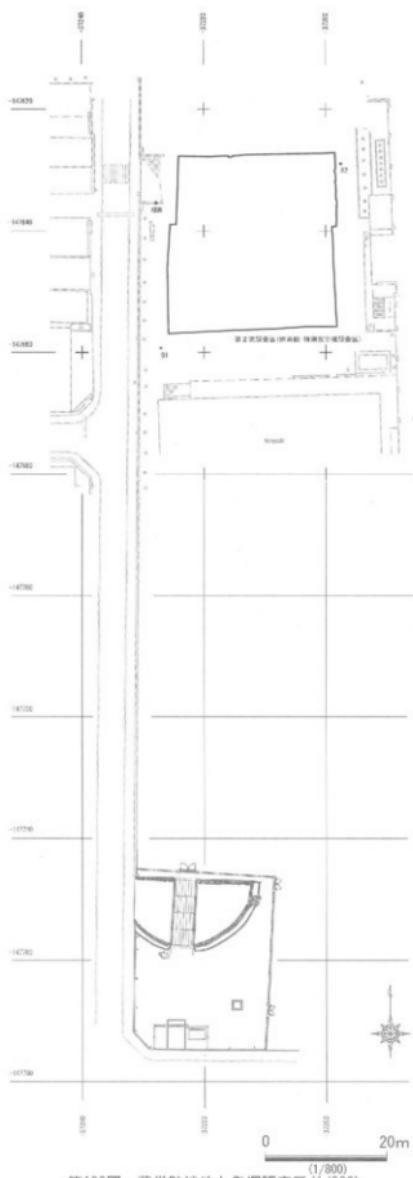
1 藩学跡の概要

測量基準の設定

測量にあたっては、発掘調査区に設置した2点の基準点及び、体育馆・特別教室棟設計用に隣接する市道に設置されたベンチマークを利用して、泮池の南側に仮の基準点3点(S1～S3)を設置した。同時に調査区内の仮ベンチマークから水準測量を行い、上記のS1、S2に水準をおとしている。



写真17 史跡 旧岡山藩藩学跡の現状



第193図 藩学跡沖池と発掘調査区(1/800)

藩学跡の概要

藩学跡はおよそX=-147745から-147775、Y=-37210から-37230の位置にあたり、発掘調査区からはおよそ100mから120m南にあたる。現在、藩学跡の北側、東側は中学校校庭に南側と西側は市道となっている。(第193図)

藩学跡はフェンス付きのコンクリート塀に囲まれている。この北寄りに沖池があり、沖橋と呼ばれる石桁橋が架かる。沖池の西端部分は、先にも述べた戦災復興の区画整理により藩学跡の外、市道の下になってしまっている。南側の市道に面して入口が設けられており、「史跡 旧岡山藩学跡」の標柱、同説明板、岡山藩学跡沖池記念碑が設置されている。コンクリート製の門を入ると、イチョウや松の木が植えられた広場である。広場内には、東側の端に二基のベンチ、東よりに花崗岩製の井戸枠、沖池前に「明治天皇行幸記念碑」が置かれている(第194図)。なお、藩学跡北側の校庭にも、女子師範学校の記念碑、県立第二岡山高等女学校の記念碑、熊沢蕃山の顕彰碑、岡山大学教育学部附属小学校の記念碑などが設置されている。なお、藩学跡の標高は3.45m前後であり、中学校校庭から50cmほど低くなっている。

花崗岩製の井戸枠は削り抜き式のもので、一边158cm、内法が一边121cmの方形である。高さは現状で76cmを測る。現在、井戸枠のみが置かれており、付近に井戸跡もない。藩学跡図では沖池の西側脇と南側に二基の井戸が描かれており、もとはこれらの井戸に設置されていたものかもしれない。(写真18)

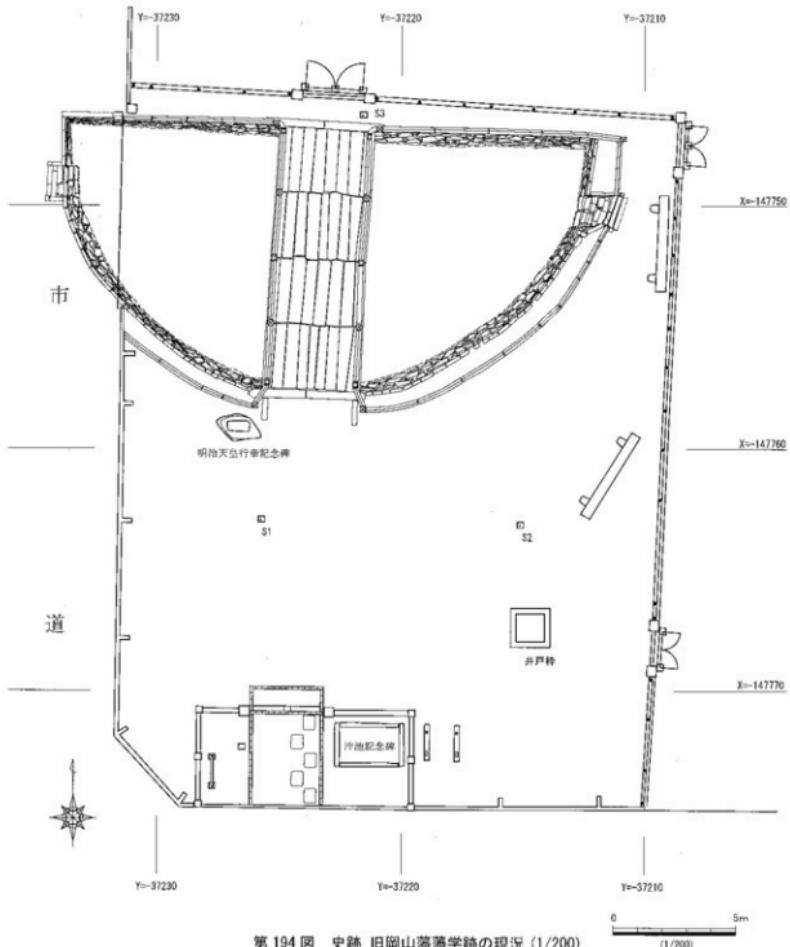


写真18 井戸枠

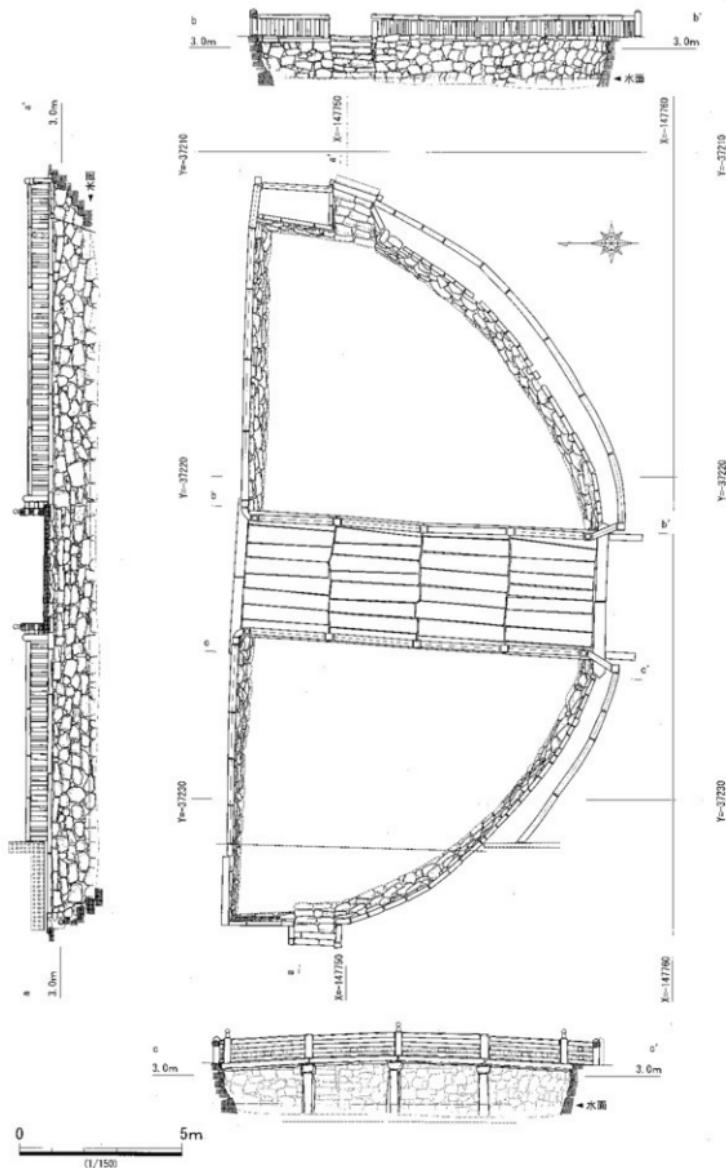
2 藩学跡泮池の測量・実測

泮池とは

泮池は校門前に設置された半円形の池で、中国古代、周の「頤宮」^{(1)と(2)}の制に倣ったものとされる。頤宮とは、天子の学校である「辟雍」に対し諸侯の学校である。辟雍は学堂の四方に水を廻らして「壁」を象り、東西南北に四橋を架す。それに対し、頤宮では学堂の東西南の三方に水を廻らせ「壁」半分を象ったものとし、三橋を架す⁽¹⁾。岡山藩学の泮池では半円形の池に泮橋と呼ばれる石桁橋を架し、東西には橋に擬した階段を設けている。まさしく、岡山藩主池田光政の儒教的教育理念を象徴する施設といえる。



第194図 史跡 旧岡山藩藩学跡の現況 (1/200)



第195図 旧岡山藩藩学跡 沖池 (1/150)

洋池の法量と構造

洋池は、東西21.5m、南北10.9mの半円形で、周囲は石垣で囲まれている。中央、南北方向には洋橋を架し、石製の擬宝珠高欄の欄干をつける。東西に石段を設け、洋池の周囲には石玉垣風の石製の柵を廻らしている。現在、洋池の底は標高約1.8m、水位は天候などによっても変わるものかもしれないが、標高2.1m程度であった。泥が堆積しているため本来の底の状況は不明だが、ポールなどを泥に差し込むと標高1.6m程度の高さに堅い面があり、塗喰などはされているものと見られる。

石垣

石垣は花崗岩石材を1.5m程の高さに積んでおり、上端に高さ約15cm、幅約20cm、長さ30～220cmほどの長い花崗岩切石を並べている。現在、石材の間は大部分がモルタルで埋められている。石材には自然石に近いものから矢穴のある割石、加工度の高い長尺のものなど様々な石材がある。石垣の傾斜も、下部がやや緩やかで上部が急になっているほか、南西部の一部などほかと比べて急になっている部分も認められる。こうした特徴は石垣が何度か積み直し、修理などされていているためと思われる。

石垣の下部は30～80cmほどの自然石に近い石材を、平坦な面を表に出しながらも野面積みにしている。上部は割石がやや多く、矢穴を持つものも目立つ。特に洋橋下の橋台となる部分には、長さが1m程の長い割石が多く使用されている。矢穴は幅が7～9cmを測る。また、南西部の一部では石積みの目地が大きく乱れており、石垣の下端近くまで積み直されているものと見られる(写真21)。西側の市道の下になっている部分では、上部に加工度の高い長尺の石材が多い。また、石垣上端の切石も、市道の下になっている部分から北面のものは長さ2m前後の、ほかの部分のものより長いものが多く、洋橋の擬宝珠高欄の地覆や石柵の笠石の石材を転用したものと思われるものも含んでいる。切石の下に間詰め的に豊島石石材が認められる部分もある。北面石垣の立面に、観察できる石積みの境界を示したのが第196図である。積み直しの時期や機械は不明だが、洋橋の架け替えを伴う大規模なものを含



写真19 洋池石垣（北面東半部）

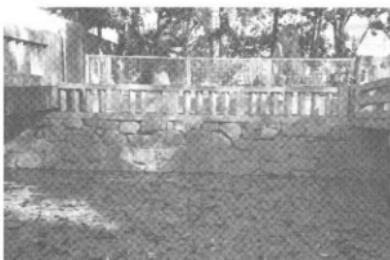


写真20 洋池石垣（北面西半部）



写真21 洋池石垣（南西部の石積み）

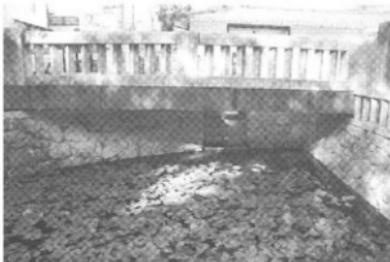


写真22 洋池石垣（西側の状況）



第196図 沖池石垣の石積み（北面）(1/180)

んでいる可能性が高い。また、沖池西端部の上部や北面上端の石材は、戦災復興の区画整理に伴うものである可能性が高い。特に西側の石段部分では上部に水道管とみられる銅鉄製のパイプなどが入っており、石段も上半部は段差や間隔、石材も異なっている。

沖橋

沖池の中央、南北方向に架けられた花崗岩製の石橋で、石製の擬宝珠高欄の欄干をつける。長さ10.9m、幅3.9～4.0mを測る。橋脚は三対で、断面方形の花崗岩割石三本で橋の幅いっぱいの長い花崗岩割石の梁を支えている。橋脚は下に礎石などを伴っているかは分からぬが、上端に突起を造り出し、梁にあけられた削り込みに差し込まれている。この梁の上に幅30～50cm、長さ2.6～2.7m、厚さ20cm程度の板状の花崗岩を並べている。この石材は花崗岩の割石で、上面や側面は切石状に丁寧に加工されているが、下面はほとんど加工されていない。

欄干の擬宝珠高欄も花崗岩製で、青銅製の擬宝珠の付いた断面方形の石柱三対と、その間に擬宝珠が付かず上面をかまぼこ形に加工した断面方形の石柱二対に、断面かまぼこ形の架木、断面方形の平桁、地檻状の石材を架ける。なお、沖橋中央の石柱の擬宝珠は両側とも欠損している。欄干の北端は平面円弧状の石材で、南端は平面平行四辺形の石材でそれぞれ石壇とつながれている。地檻と平桁の間には込橋をいれており、平桁と架木の間に石柱側に東石を入れている部分がある。橋の上面から架木の上までの高さは約70cm、地檻、平桁、架木、石柱の幅は21.2cmを測る。なお、240ページの写真46を見ると、石柱の横には地檻、平桁、架木の間すべてに現在のものと異なる櫛東状に加工された東石が入ってたことがわかる。欄干の石材の中には石材表面の加工が異なる明らかに新しい石材が含まれており、先述の沖池石垣上端の石材に擬宝珠高欄の地檻石材を転用したものがあることからも、戦後かなり修復されているものと思われる。沖池や沖橋の戦災による被害については不明だが、講堂や校門、南門など周囲の建物を焼失していることから、沖橋についてもいくらかの被害があったもの



写真23 沖橋（西側から）

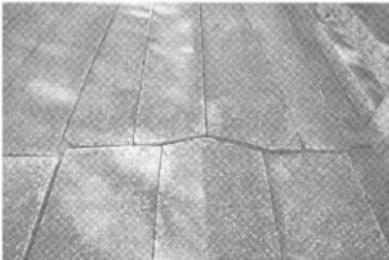


写真24 沖橋石材の状況

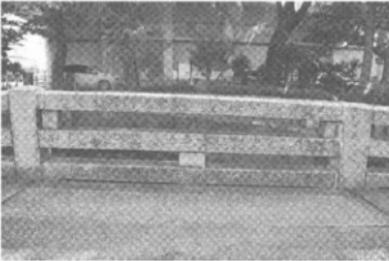


写真25 沖橋の欄干

と思われる。

石段

洋池の東西両側には「領宮」の東西の橋に見立てる石段を設けている。石段は幅約1.2mで、路面、蹴上とも20cm程度を測る。東側の石段は7段で、1段に2ないし3の花崗岩を並べている。西側は4段ほどしかないが、下から3段目より上は石材が異なり、蹴上も50cmほどと高くなっており、先述のとおり戦災復興の区画整理の際に積み替えられたものと見られる。



写真26 洋池石段（東側）

石柵

石柵は洋池北面では石垣上に、ほかは石垣から0.8～1m外側に廻らされている。幅18cmほどの地覆石の上に石柱を立て、その上に幅18cm、高さ12cm、長さ0.8～2.2mの断面五角形の笠石(架木)を乗せている。石柱は笠木の継ぎ目部分に一辺18cmの断面方形の石材を配し、その間は運子窓風に角を正面に向けて一辺12cm程度の石材を15cm程度の間隔で並べている。地覆の上面から笠石の上まで約64cmを測る。なお、洋池西側では市道のため石柵は失われている。

3まとめ—絵図による洋池と現状—

洋池とこれに架かる洋橋は岡山藩藩学跡の当時の様子を忍ばせる唯一の構造物である。これまで見てきたように、石垣の積み直しなど手が加えられてきたことが分かるが、古写真や藩学絵図などと比較してもさほど大きな違いはない。藩学絵図類には比較的詳細に洋池、洋橋の様子が描かれている。これらと現状とを比較すると若干異なる部分が見受けられる。

絵図に見える洋池を見ると、北面の石柵は石垣上に、その他の部分は石垣から間隔を開けて廻らされており、柱を柵の方向と直行する向きに配した表現がされている絵図(T11-21)⁽¹⁾もあるなど、現状と非常に良く合致している。一方、洋橋を見ると、擬宝珠高欄の北端が現状と異なり、南端と同じく直線的に開く形状をしており、石柵とはつながっていない。また、縮小以前のものと見られる絵図(T11-129-8)⁽²⁾では、洋橋を斜めに俯瞰した表現がされており、大きな貫を伴う木製とみられる橋脚が描かれている。『岡山市史』第三⁽³⁾に「寛延三年庚午七月二十九日、洋橋を改造して石橋とす」との記事が引用されており、寛延3年(1750)以前は木橋であったようだ。

同じ建物配置を取り絵図であっても異なる表現をしているものもあり、これらの絵図の表現がどこまで正確に描かれたものかは分からぬ。しかしながら、現状の観察においても、先の寛延3年(1750)のものを含め、洋橋の架け替えを伴う変更がされてきたことを窺わせるものがあり、当然のことではあるが江戸期を含め不变のものではなかったようだ。また、先述の240ページの写真46では東石のほか、現在は欠損している擬宝珠も写っており、これらの欠損が戦災によるものである可能性は高い。石材の転用状況からみても、少なくとも洋橋の擬宝珠高欄は戦災に伴いかなりの被害を受けたものと思われる。

注

(1) 笠井助治 1982『近世藩校の総合的研究』吉川弘文館

(2) 岡山大学付属図書館蔵。なお、同じ表現の絵図に林原美術館所蔵のものなどがある。

(3) 岡山大学付属図書館蔵。墨絵部分の建物などを描いていないが、『岡山市史 宗教教育編』掲載の絵図とほぼ同じ内容。

(4) 番知 順・小林久磨雄編 1937『岡山市史』第三 岡山市役所

第7章 岡山城三之外曲輪跡出土の動物遺存体

岡山理科大学 富岡直人

1 資料とその出土状況

岡山県岡山市蕃山町6-10で発掘された岡山城三之外曲輪跡は、岡山平野を南北に流れる旭川の形成した沖積低地に所在する近世の遺跡である。2007年度に岡山市教育委員会によって調査・発掘され、溝、土坑(廐棄土坑を含む)、井戸、廐が検出された。それに伴って(1)17世紀前半、(2)18世紀前半、(3)18世紀末～19世紀初頭、に属する動物遺存体が出土した。

本報告は、この資料群(74点)について実施した同定・分析の結果を記すものである。

多くの資料は低湿地性の埋存環境に影響され茶褐色に変化し、一部はビビアナイト(藍鉄鋼(Vivianite: $\text{Fe}_3\text{P}_2\text{O}_9 \cdot 8\text{H}_2\text{O}$))を析出し、脆弱化している。

2 出土動物遺存体の特徴

検出された動物遺存体のうち綱目科属種の分類名が明らかになったものについて、標準和名と学名を表3に掲げる。

データ集計整理の便宜のために「動物遺存体整理番号(ANo.)」を付した。文中でもこのANo.を用いて内容を記載する。出土資料の属性は、表6に示す。

以下に、主な出土資料について、生物分類の階級「門、綱、目、科」に従って記載を行う。

表3 岡山城三之外曲輪跡出土動物遺存体種名表 List of the animal remains from Okayama-jyo San-no-soto site

軟体動物門	Mollusca
腹足綱	Gastropoda
アカニシ科	Muricidae
アカニシ	<i>Rapana venosa</i> (Valenciennes)
脊椎動物門	Vertebrata
硬骨魚綱	Osteichthyes
スズキ目	Perciformes
タイ科	Sparidae
マダイ	<i>Pagrus major</i> (Temminck et Schlegel)
鳥 綱	Aves
キジ目	Galliformes
キジ科	Phasianidae
ニワトリ	<i>Gallus gallus domesticus</i> Brisson
ガンカモ目	Anseriformes
ガンカモ科	Anatidae
マガノ	<i>Anser albifrons</i> (Scopoli)
コウノトリ目	Ciconiiformes
サギ科	Ardeidae
スズメ目	Passeriformes
ツグミ科	Turdidae

1 資料とその出土状況

哺乳綱	Mammalia
ウシ目(偶蹄目)	Artiodactyla
イノシシ科	Suidae
イノシシ類	<i>Sus scrofa</i> subsp. indet.
シカ科	Cervidae
ニホンジカ	<i>Corvus nippon</i> Temminck
ウマ目	Perissodactyla
ウマ科	Equidae
ウマ	<i>Equus caballus</i> Linnaeus
ネコ目(食肉目)	Carnivora
イヌ科	Canidae
イヌ	<i>Canis familiaris</i> Temminck
ネコ科	Felidae
イエネコ	<i>Felis catus</i>
クジラ目	Cetacea
ネズミイルカ科	Phocoenidae
スナメリ	<i>Neophocaena phocaenoides</i> (Cuvier)

表4 造標と出土動物遺存体の関係

時期	出土造標	出土動物遺存体(◎: 5点以上の部位が出土しているもの)	遺跡の利用状況
17世紀前半	SD320	アカニシ、マダイ、キジ科、ニワトリ◎、マガツ、イヌ◎、イノシシ類、ニホンジカ◎、ウマ	蒲SD320は岸敷境の水路と考えられる。蒲学造成で埋め立てられた。埋め立て以前は東に武家屋敷西に寺院(円乗院)が存在した。
	SP291	哺乳綱日不明	
17世紀後半?	SK275	マダイ	藩学、池田主膳殿御屋敷武家屋敷(土塁裏)として利用された。SK283とSP290は藩学の敷地内に設けられた廐塗上坑、埋納上坑と考えられる。
18世紀前半	SE255	ニホンジカ	
18世紀末~19世紀初頭	SK283	スナメリ	
	SP290	イエネコ	

1. 腹足綱 Gastropoda

アカギガイ科 Muricidae

アカニシ *Rapana venosa* (Valenciennes)

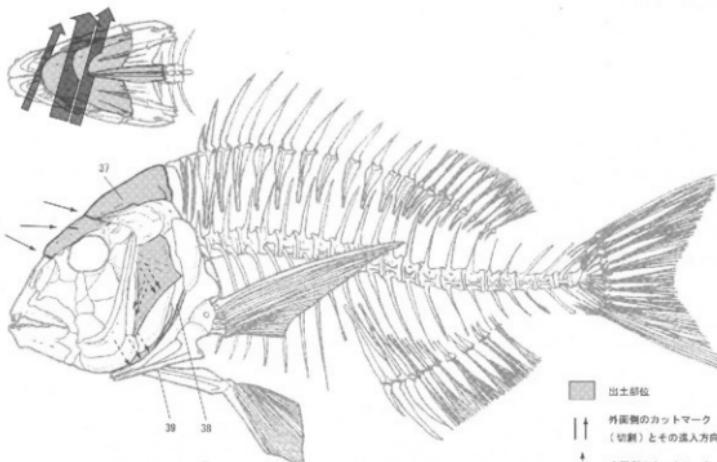
風化し変色した殻軸が出土した。本種は、内湾泥底の水深5~20mに多く生息する肉食性の巻貝で、場合によっては潮間帯でも採集されることがある。岡山城周辺の近世・近代遺跡で多く出土する種である。

2. 硬骨魚綱 Osteichthyes

タイ科 Sparidae

マダイ *Pagrus major* (Temminck et Schlegel)

日本各地の沿岸に生息する種で岡山の海岸部の遺跡で時代を通じて多く検出される魚種である。岡山城周辺の遺跡群でも頭部を加工した痕跡を残す例が多い。第197図で示した通り、本遺跡での場合は、前額骨と上後頭骨(ANo. 37)に対しては顔面に対して前位から水平方向に刃器が挿入されている特徴が認められた。



第197図 マダイ出土部位と破損の位置 図中の数字は動物遺存体監理番号(No.)を示す。

3. 鳥 級 Aves

キジ科 Phasianidae

キジ科属不明とニワトリ *Gallus gallus domesticus* Brissonが出土した。

カモ科に比べるとやや少ないものの、散乱状態で出土したニワトリの骨格が確認された。これらは解体処理された可能性が高いと考えられる。岡山城周辺の遺跡では、著者らの研究によりニワトリの出土が指摘され、時告鳥として神聖視されることのあったニワトリも岡山城下では食用とされていたことが明らかであったが、本資料もそれを裏付けるものと考えられる。

サギ科 Ardeidae gen. et sp. indet

出土した頭蓋は、大きさや形状から中型のサギと推定される。江戸時代広く食用とされた鳥類の一種であり、岡山城およびその周辺遺跡から数点が検出されている。

カモ科 Anatidae

マガノ *Anser albifrons* (Scopoli)

同一個体の可能性のある胸骨、鳥口骨、癒合鎖骨がSD320よりまとまって出土した。岡山城およびその周辺遺跡から検出される例の多い鳥類の一つである。

スズメ目 Passeriformes

ツグミ科 Turdidae

17世紀前半の溝SD320よりツグミ科の頭蓋が出土した。ツグミはやや小型の野鳥で、冬鳥の渡鳥であるが、広く食用にも利用されていたことが知られており、明確な切創がないものの、人の食用や動物の餌として消費され廃棄された可能性がある。

4. 哺乳綱 Mammalia

ウマ科 Equidae

ウマ *Equus caballus* Linnacus

溝SD320で下顎骨、橈骨、中手骨が検出された。このうち中手骨に切創(cut mark)がみられ、意図的に解体処理されたものである可能性が高い。

出土資料のなかで下顎骨は特に貴重である。計測値を第3表と第4表に掲げる。本資料には犬歯がみられ、高い確率でオスであると考えられる。いずれも同一個体に由来する可能性がある。推定体高は、橈骨からは130～135cm、中手骨からは125cm程度という数値が求められることから、在来馬の特徴を持つ小～中型のウマと考えられる。

表5 ウマ頭蓋骨・歯牙計測表

構造・測定部位	所在地	時期	副位・ 後退位	後退位 測定値	Length of mandibular ramus mm		Length of molar mm		Laf of cheek- teeth mm								Oriens 1978 による名前	備考	
					F2～F4	F2～F3	B1～B2	B2～B3	P2～P3	P2～P3	P3～P3	P4～P3	P1～P2	P1～P2	P1～P3	P1～P4			
中人遺跡(6C106)作井浜	糸井浜	3世紀後半前後	An.2		96.67	55.61	62.22						(111.14)					3～1歳 開始2002 以上:	
以上上:																			
岡山城内遺跡(1)	岡山城	17世紀前半前後	(1-02)	81.99	58.10	53.00			170.38				(111.20)	117.00				7～10歳 開始1999	
岡山城内遺跡(1)	岡山城	17世紀前半前後	(1-03)	82.61	58.99	72.26			155.30				(88.50)	116.70	280.50			3～10歳 開始1999	
岡山城内遺跡(1)	岡山城	17世紀前半前後	(1-04)				94.1		68.90									7歳後半	
岡山城内遺跡(1)	岡山城	17世紀前半前後	(1-05)						169.00									全7頭	
岡山城内遺跡(1)	岡山城	17世紀前半前後	(1-06)											132.50					香川1997
カラリヤツ	鹿児島県	現代	アラ(4頭)	79.45		—	28.10		148.90									#1	
カラリヤツ	鹿児島県	現代	アラ(4頭)	80.25		—	28.15		151.20									#1	
カラリヤツ	鹿児島県	現代	アラ(2頭)	87.00		—	30.85		156.70									#1	
カラリヤツ	鹿児島県	現代	アラ(2頭)	82.00		—	30.60		155.10									#1	
ソノウツ	鹿児島県	現代	アラ(4頭)	81.30		—	30.00		151.20									#1	
ソノウツ	鹿児島県	現代	アラ(4頭)	86.90		—	30.00		151.20									#1	
ソノウツ	鹿児島県	現代	アラ(4頭)	84.00		—	30.00		151.20									#1	
岡山城内遺跡(2)	岡山城	17世紀前半前後	(2-01)	90.00	58.10	83.05	49.75	56.53	160.70	125.25	132.25	116.95						年齢以上	
岡山城内遺跡(2)	岡山城	中世～古代下限	(2-02)	91.20		59.30				189.10								年齢1～型年	

(＊12頭中11頭にみられる)

イノシシ科 Suidae

イノシシ類 *Sus scrofa*

イノシシもブタも岡山県内の近世遺跡からは出土することが知られるが、特にブタは岡山城二ノ丸、中国電力ビル地点や天瀬遺跡で出土しており、近世には岡山城周辺ではブタが流通していた可能性がある。

本調査では、摩耗した尺骨が出土したのみであり、家畜ブタかイノシシか分類できないことから、ブタも含むカテゴリーとしてイノシシ類 *S. s. subsp. indet* として報告する。

シカ科 Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon* Temminck

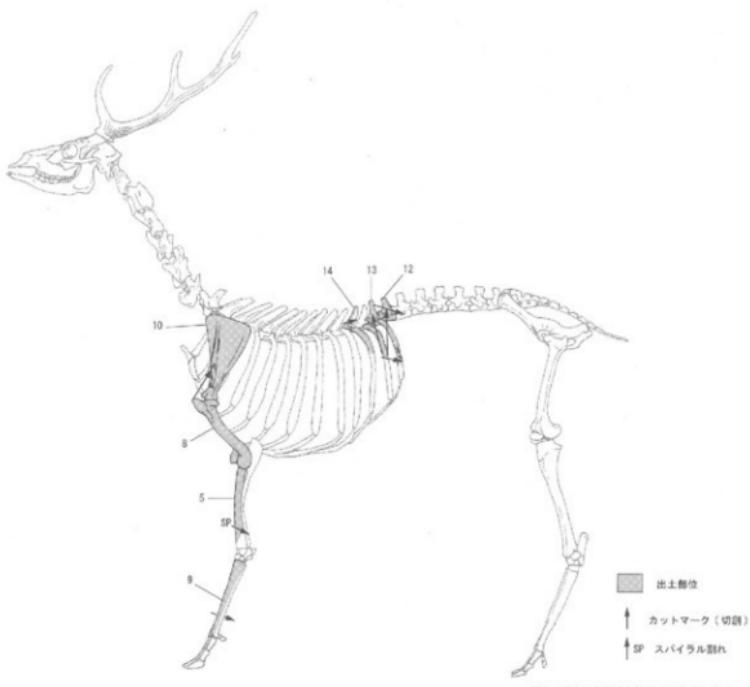
17世紀前半の溝であるSD320より18点、18世紀前半の井戸であるSE255より1点出土した。近世の岡山藩内では、ニホンジカは農業の害獣や巻狩の対象として知られる。岡山城下では、天瀬遺跡から多量のニホンジカが出土しているが、本遺跡のSD320の場合も集中した出土例として貴重である。

第198図に同一個体と考えられるニホンジカの出土部位と破損痕跡の位置を示した。肋骨や椎骨を中心として切創が数多く検出されているが、一方で前肢であるAn.8, 9, 10は関節面に切創はみられず、バティナの付着状況から関節したまま廃棄されたものと推定される。同様に四肢骨が連結した状態で出土した例は、岡山城二ノ丸中国電力ビル地点でも指摘されている。近世の岡山ではニホンジカの解体処理は肉の部位によって作業方法が異なっていたものと推定される。

イヌ科 Canidae

イヌ *Canis familiaris* Temminck

17世紀前半の溝であるSD320より、一括したイヌが出土した。本来は同一個体に由来する可能性が高



第198図 同一個体と考えられるニホンジカの出土部位と破損の位置

いと考えられる。出土した6点の資料の中には確実な切創を残す資料が4点みられた。関係で出土した頭蓋(ANo. 28)も当時のイヌの形質を伝える貴重な資料である。人による食用のみならず、タカ類の餌や皮革製品、筆などの原料として利用されたと考えられる。

ネコ科 Felidae

イエネコ *Felis catus*

17世紀前半の溝であるSD320出土資料の脛骨の一つに切創がみられた。

愛玩用のみならず、タカ類への餌や皮革製品などの原料としてもイヌとともに供されたと考えられる。ただし、天瀬遺跡での場合と同様、イヌに比較すると切創のみられる率は低い。

18世紀末～19世紀前半のSP290より、小型の備前焼甕に入れられたイエネコの一括資料が出土した。やや小型ながら歯の萌出状況から成猫であったことが推定される。この遺跡周辺で飼わ

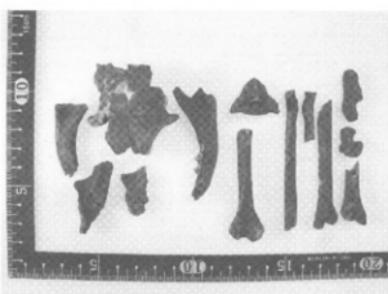


写真27 SP290 出土イエネコ



写真28 スナメリ頭蓋(歯・上顎骨・耳骨)

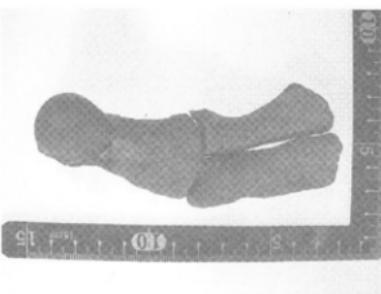


写真29 スナメリ上腕骨・尺骨・桡骨

れていたものか、丁寧に埋葬されたものと見られる。これら2体のイエネコは、同じ遺跡で出土しながら対照的な扱われ方をしたといえよう。

クジラ目 Cetacea

ネズミイルカ科 Phocoenidae

スナメリ *Neophocaena phocaenoides* (Cuvier)

18世紀末～19世紀前半の土坑SK283から木箱におさめられた幼齢のスナメリ一括個体(ANo. 54～61)が出土した。頸骨と歯の形態および上腕骨・尺骨・桡骨の形態からスナメリと同定された。

淡川海洋水族館所蔵の幼齢のスナメリ(母親と一緒にストランディングして死亡した個体)の骨格とほぼ同じ大きさであることから、生存している時には全長120～140cm程度であったと推定される。出土した箱は後世の搅乱により壊されており、箱の大きさや鱗部の状況などは不明だが、出土状況(第4章第118図)はほぼ解剖学的位置を保っているように見受けられ、全身が納められていた可能性が高い。土坑SP283は藩学の北限か隣接する武家屋敷地内か微妙な位置ということであるが、このように収納しているということは、通常の武家屋敷での利用は考えにくく、藩学での教材や漢方薬の素材として利用されたことが考えられるが定かではない。

本来瀬戸内海に多く生息し、河口の浅海にまで進入することから身近なイルカの一種であったが、近年の環境破壊で著しく生息数が減じている。今となっては本遺跡での出土例は、当時の瀬戸内海の豊かさを伝える資料といえる。

謝辞

岡山市教育委員会・埋蔵文化財センター各位には資料の提供とともに様々な御教示御援助を頂いた。また、分析にあたっては、岡山理科大学の畠山智史君の御協力を得た。

参考文献

- 金子浩昌 1995『津寺遺跡出土の動物遺体』『津寺遺跡2 山陽自動車道建設に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98 :pp. 597-604
- 金子浩昌 1996『津寺遺跡中屋調査区出土のウマ遺存体』『津寺遺跡3 山陽自動車道建設に伴う発掘調査12』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104:pp. 282-285
- 後藤仁政、大澤司紀之編 1986『雀の比較解剖学』(医師薬出版株式会社)
- 富岡直人 1998『岡山城二の丸跡出土の動物遺存体』『中国電力内山下変電所建設に伴う調査報告』岡山城二の丸跡 pp. 136-163
- 富岡直人 1999『津寺三本木遺跡、津寺一軒屋遺跡出土の動物遺存体』『津寺三本木遺跡・津寺一軒屋遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告142 岡山県教育委員会:pp. 208-211
- 富岡直人 1999『岡山縣加茂所遺跡出土ウマ遺存体』『加茂所遺跡・高松原古才遺跡・立田遺跡 3分冊』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告143 岡山県教育委員会:pp. 1-10

調査報告138 岡山県教育委員会:pp. 1111-1123

富岡直人 2000 「新窓町3丁目遺跡出土動物遺存体」『新蔵町3丁目遺跡徳島保健所地点』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書31:pp. 127-138

富岡直人 2001 「井手天原遺跡出土動物遺存体」『岡谷大溝散布地・三須今瀬遺跡・三須河原遺跡・三須畠田遺跡・井手天原遺跡-1』(国道429号線改良に伴う発掘調査Ⅱ-1) 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告156 岡山県教育委員会:pp. 224-237

富岡直人 2001 「岡山県アヒ灘跡出土動物遺存体の分析」『大瀬遺跡・岡山城外鬼塚』岡山県埋蔵文化財調査報告書154 岡山県教育委員会:pp. 89-121

富岡直人 2002 「中平入跡跡出土ウマ遺存体分析」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第380集 中平入跡跡・巣曳塚古墳発掘調査報告書 第1分冊』岩手県文化振興事業団:pp. 296-301

富岡直人 2002 「百間川米田遺跡出土動物遺存体の分析」『百間川米田遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告164 岡山県教育委員会:pp. 327-353

富岡直人 2003 「岡山城二の丸跡出土の動物遺存体の分析」『岡山城二の丸跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告175 岡山県教育委員会:pp. 177-193

西中川 駿 1989 「古代遺跡出土七骨からみたわが国の牛・馬の起源、系統に関する研究-特に日本在来種との比較』(昭和63年文部省科学研究費補助金研究成果報告書)

林田重幸・山内忠平 1954 「日本古器物時代馬について」『日本古器物公報』2(2-4):pp. 122-126

林田重幸・山内忠平 1957 「馬における背長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学术報告』6:146-156

林田重幸 1957 「中世日本の馬について」『日本古器物公報』28(5):pp. 301-306

Angela von den Driessch 1976 "A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites" Peabody Museum Bulletin 1, Museum of Archaeology, Harvard University

表6 出土動物遺存体属性表

No.	遺構番	遺構	時期	大分類	小分類	部位	LH	部分1	部分2	成長度	健強	變形	色調	計測値	備考
1	計量3	SP3208	ITC南手	堀丸廻	ウマ	D頭骨	LH	LICO	RPO, LPG, POC PLO ML, RL, RPL, RPO	30.0(頭蓋骨, 年 月半死亡) 30.0(頭蓋骨, 年 月半死亡)	後頭側面タイプ内後 方(後頭側面) 右後頭側面	なし	黄褐色	0:116.60 Ge:169.70 T: 83.81 B: 90.05 22: 50.30 22: 108.96 22: 108.96 3: 126.75 10: 207.60 19: 181.05 20: 176.01	オストリカ可塑性高。
2	近世3	SP3208	ITC南手	堀丸廻	ウマ	頭骨	L	死前	Ap-T	なし?	なし	黄褐色	B:	0: 361.00 Bp: 61.05 Bt: 50.10	
3	計量3	SP3208	ITC南手	堀丸廻	ウマ	中手骨	L	死前	Ap-T	Dia(骨質化)	なし	黄褐色	B:	0: 319.15	
4	計量3	SP3208	ITC南手	堀丸廻	コホンジカ	頭骨	L	死前	Ap-T	なし?	なし	黄褐色	B:	0: 353.00	
5	近世3	SP3209	ITC南手	堀丸廻	コホンジカ	頭骨	L	死前	Ap-T	なし?	なし	黄褐色	B:	0: 34.50	
6	近世3	SP3209	ITC南手	堀丸廻	ニホンジカ	頭骨	L	死後+死後	p-T	Dia(dia)	なし	黄褐色	B:	0: 34.50	
7	近世3	SP3209	ITC南手	堀丸廻	ニホンジカ	頭骨	L	死後+死後	p-T	Dia(dia)	なし	黄褐色	B:	0: 36.00	
8	近世3	SP3209	ITC南手	堀丸廻	ニホンジカ	上顎骨	L	死前	Ap-T	なし?	なし	黄褐色	B:	0: 139.00	
9	近世3	SP3209	ITC南手	堀丸廻	ニホンジカ	中手骨	L	死前	Ap-T	Dia(骨質化)	なし	黄褐色	B:	0: 47.45 Bp: 36.00	Aka, 3と混合
10	近世3	SP3209	ITC南手	堀丸廻	ニホンジカ	肩甲骨	L	死後	Ap-T	Dia(肉眼上下方内-外 側面後方)dia	なし	黄褐色	B:	0: 183.90 Bp: 26.80	Aka, 3と混合
11	近世3	SP3209	ITC南手	堀丸廻	ニホンジカ	脛骨	L	死後	Ap-T	Dia(頭蓋骨, 1頭骨)	なし	黄褐色	B:	0: 25.00	
12	近世3	SP3209	ITC南手	堀丸廻	ニホンジカ	脛骨	M	死後, 死後, 死後	Ap-T	Dia(頭蓋骨, 1頭骨)	なし	黄褐色	B:	0: 25.00	
13	近世3	SP3209	ITC南手	堀丸廻	ニホンジカ	脛骨	M (1)	死後, 増殖	Ap-T	Dia(頭蓋骨, 1頭骨)	なし	黄褐色	B:	0: 25.00	
14	近世3	SP3209	ITC南手	堀丸廻	ニホンジカ	脛骨	M	死後	Ap-T	Dia(頭蓋骨, 1頭骨)	なし	黄褐色	B:	0: 25.00	
15	近世3	SP3209	ITC南手	堀丸廻	ニホンジカ	脛骨	M	死後	Ap-T	Dia(頭蓋骨, 1頭骨)	なし	黄褐色	B:	0: 25.00	
16	近世3	SP3209	ITC南手	堀丸廻	ニホンジカ	脛骨	M	死後	Ap-T	Dia(頭蓋骨, 1頭骨)	なし	黄褐色	B:	0: 25.00	
17	近世3	SP3209	ITC南手	堀丸廻	ニホンジカ	脛骨	M	死後	Ap-T	Dia(頭蓋骨, 1頭骨)	なし	黄褐色	B:	0: 25.00	
18	近世3	SP3209	ITC南手	堀丸廻	ニホンジカ	脛骨	M	死後	Ap-T	Dia(頭蓋骨, 1頭骨)	なし	黄褐色	B:	0: 25.00	
19	近世3	SP3209	ITC南手	堀丸廻	ニホンジカ	脛骨	M	死後	Ap-T	Dia(頭蓋骨, 1頭骨)	なし	黄褐色	B:	0: 25.00	
20	近世3	SP3209	ITC南手	堀丸廻	ニホンジカ	脛骨	M	死後	Ap-T	Dia(頭蓋骨, 1頭骨)	なし	黄褐色	B:	0: 25.00	
21	近世3	SP3209	ITC南手	堀丸廻	ニホンジカ	脛骨	M	死後	Ap-T	Dia(頭蓋骨, 1頭骨)	なし	黄褐色	B:	0: 25.00	
22	近世3	SP3209	ITC南手	堀丸廻	ニホンジカ	脛骨	M	死後	Ap-T	Dia(頭蓋骨, 1頭骨)	なし	黄褐色	B:	0: 25.00	

2 出土動物遺存体の特徴

例/C: 並記
 確後の属性は富岡(2002, 2003)と同じである。
 dis: 骨距離, prox: 近位端, dist: 遠位端, t: 化骨化了, uf: 化骨化未了
 計測個体の記号はUr leach(1976)に準拠する。

付章1 旧岡山市立旭中学校円筒校舎について

はじめに

体育馆・特別教室棟の新築に際し、旧岡山市立旭中学校円筒校舎が取り壊されることとなり、平成18年7月から解体工事が行われた。この校舎は、昭和30年に建設された、市立岡山中央中学校で最も古い校舎であると同時に、円筒形という特徴的な形態から、周辺の住民はもとより市民の印象の深い建築物であった。円筒形の校舎という特異性や、築後50年以上を経て、今や歴史的建築物として評価しうるものであり解体に伴い記録保存を行うこととした。

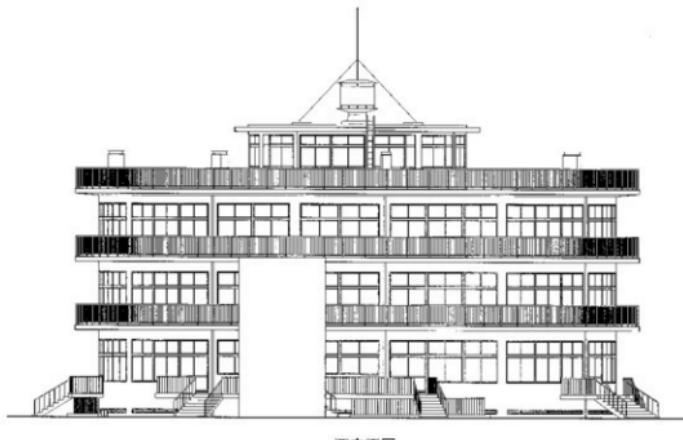
なお、本文中に掲載した円筒校舎の実測図は、「円筒校舎・西校舎解体撤去工事設計書」として岡山市営繕課が発注、クリア建築設計事務所が実測したもの、加筆等行ったものである。実測図中の教室等の呼称、床面積については、教育委員会施設課の施設台帳記載のものに従った。また、岡山市都市計画課 皆木國義課長代理に本稿の内容に関して多くのご意見、ご教示を賜った。

1 円筒（円形）校舎について

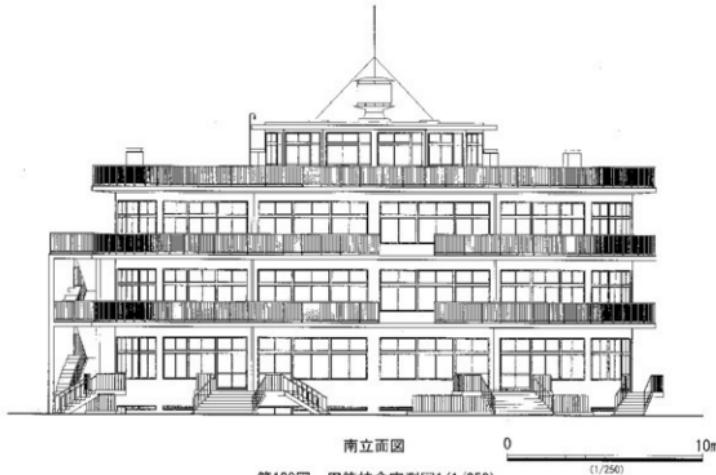
円筒校舎あるいは円形校舎と呼ばれる校舎は、文字通り円筒形の校舎であり、昭和30年代を中心には盛んに建築された。中央部に螺旋階段、ホール状の廊下があり、その周間に扇形平面の教室を配置するものが多い。外部にベランダ等を持つものと持たないものがあるが、外壁の大半をガラス窓とするものが多い。



写真30 旧岡山市立旭中学校円筒校舎全景（平成18年7月撮影）

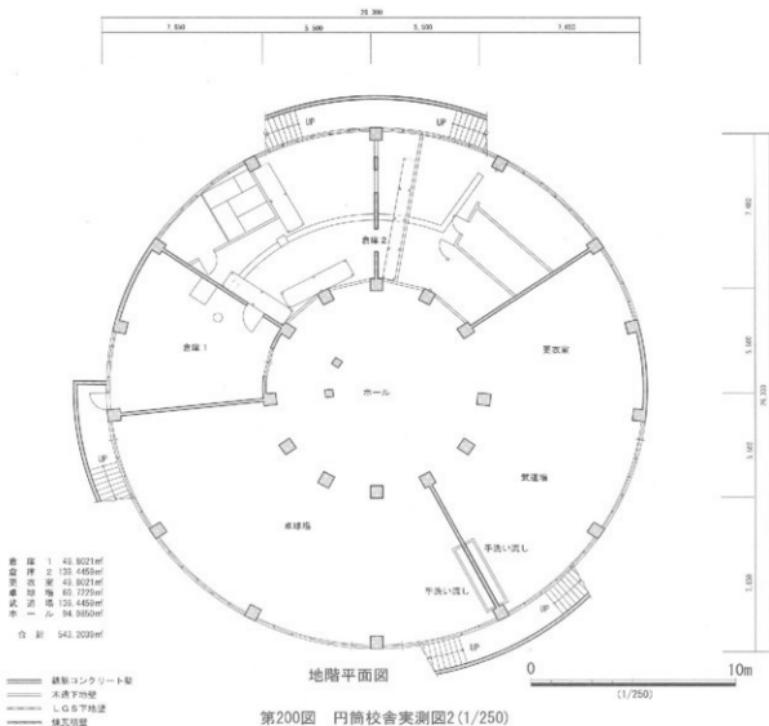


西立面図



第199図 円筒校舎実測図1(1/250)

円筒校舎は昭和29年(1954)、東京都の山崎学園富士見中学校・高等学校に建てられたものが最初といふ。円筒校舎は昭和30年代前半を中心に盛んに建設され、全国に100棟あまりが建てられたようである。円筒校舎は、狭い敷地にも建てることができ、教室や廊下を効率的に配置できることから、建築資材、建築コストを抑えることができる。そのため、教育環境を早急に整備する必要のあった昭和30年代に盛んに建設された。しかしながら、教室の平面形が扇形となり使用しにくい、後方からの採光のみであるため建物中央部が暗い、通常通路が中央部の廊下、螺旋階段に限定されるため非常時の避難経路が限定されるなどのデメリットもあった。特に、円形平面の校舎は増築が困難で、高度経済成長期の激しい児童・生徒数の増加に対し、一部に二棟の円筒校舎を渡り廊下で連結した眼鏡形平面の校舎も



作られるが、昭和40年代以降急速に作られなくなつていつたようである。

2 旧岡山市立旭中学校旧筒校舎の概要

旧岡山市立旭中学校円筒校舎は昭和30(1955)年3月に完成している^⑫。『岡山市市勢要覧』昭和31年版には、新築の円筒校舎写真とともに、「校舎校地坪数が非常に少なくて済み、従って建築費も安く出来る。教室が扇形なるため生徒の視線が集中出来効果が向上する。」と書かれており^⑬、円形校舎一般にいわれるのと同様のメリットから採用されたものとわかる。当時の設計書等は残っておらず、設計者、施工者も不明である。旧市立旭中学校や併設されていた定時制の市立岡山商業高等学校の校舎として使用されていたが、市立岡山中央中学校となってからはほとんど使用されていない。

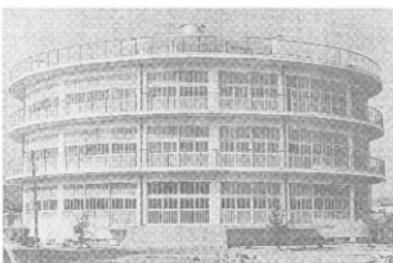


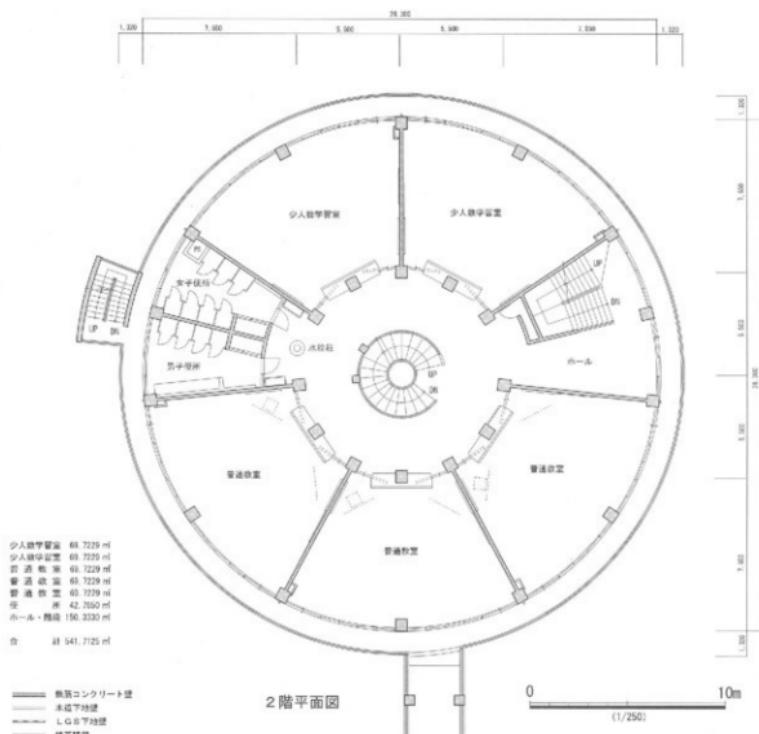
写真31 誓工当時の円筒校舎(注(4)文献より)



概要・外観

旧岡山市立旭中学校円筒校舎は鉄筋コンクリート造、地上3階塔屋付き、地下1階建てで、ベランダ（開放廊下）を除く本体の直径26.3m、避雷針、換気塔を除く高さ15.0mを測る。外側に1階には階段の付くデッキ状の開放廊下、2階～4階に幅1.32mのベランダ（開放廊下）が取り付く。外壁はほとんどをガラス窓およびガラス引き戸としており、外壁はモルタル塗り、リシン吹き付け⁽³⁾としている。なお、窓枠等は現状ではアルミサッシとなっているが、当時の写真によれば、サッシは木製の可能性が高いと思われ、3段の建具が入っていることがわかる⁽⁴⁾。校舎南側は2階と3階に渡り廊下が取り付き、南の旧西校舎と接続していた。校舎西側には外階段を設置しているが、竣工当時の写真には見えず、西校舎や北校舎の整備に際し増設されたものと思われる。1階外側の開放廊下も階段の配置や階段と柱、窓との位置関係が現在と異なっている。屋上には円筒形の換気塔、その上に避雷針を立てている。





地階

地階は採光窓を地表部に出す半地下構造で、フロアレベルは地表下1.55mを測る。調査時にはしばらく使用されていなかったこともあり、水がたまつており中に入ることができなかった。地階には外側三カ所に設けられた階段付きの通路からのみ出入りするようになっており、ほかの階と異なり中央の螺旋階段はない。内部は4室に区分されている。旭中学校の沿革によると、「昭和31年10月 円筒校舎地下に給食場が完成し、完全給食を開始する」とあり^⑩、当初は給食室として使用されていたと考えられる。給食棟が完成する昭和40年代以降の使用状況は不明だが、教育委員会施設課の施設台帳によると、最終的には卓球場や武道場、木製の仕切り壁を追加して倉庫として使用されていたようである。

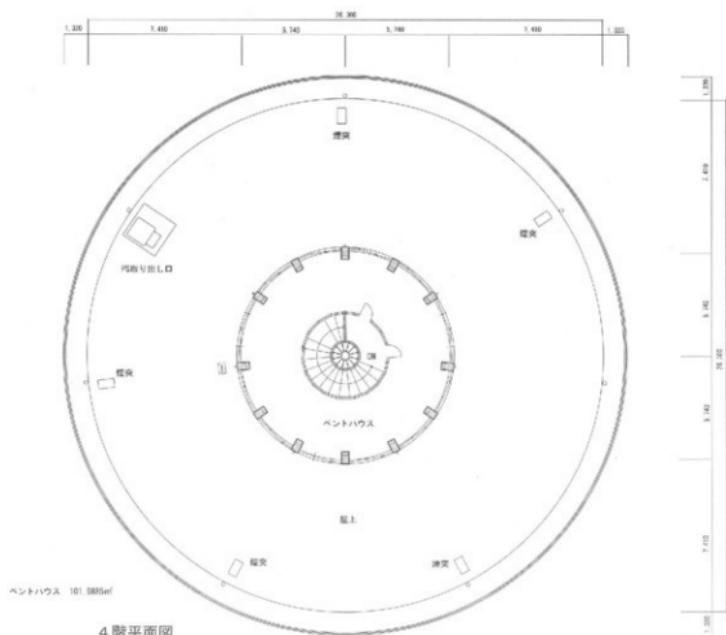
1階～3階

1階から3階は外側の開放廊下の形状や使用に伴う床材の追加などを除くとほぼ同じ平面である。中央部にホール及び螺旋階段、東側北寄りに便所、西側北寄りに階段室およびホールを配置し、ほかは北側に2室、南側に3室の教室を配置する。

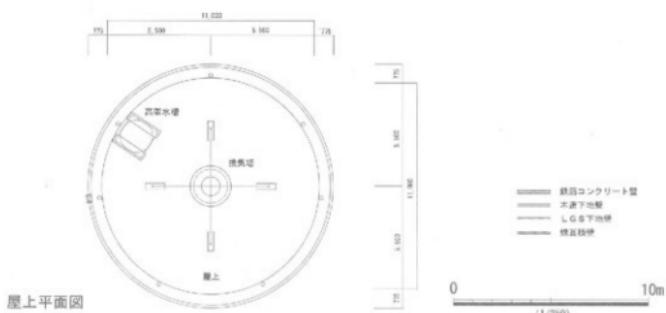


写真33 1階中央ホール及び螺旋階段

2 旧岡山市立旭中学校円筒校舎の概要



4階平面図



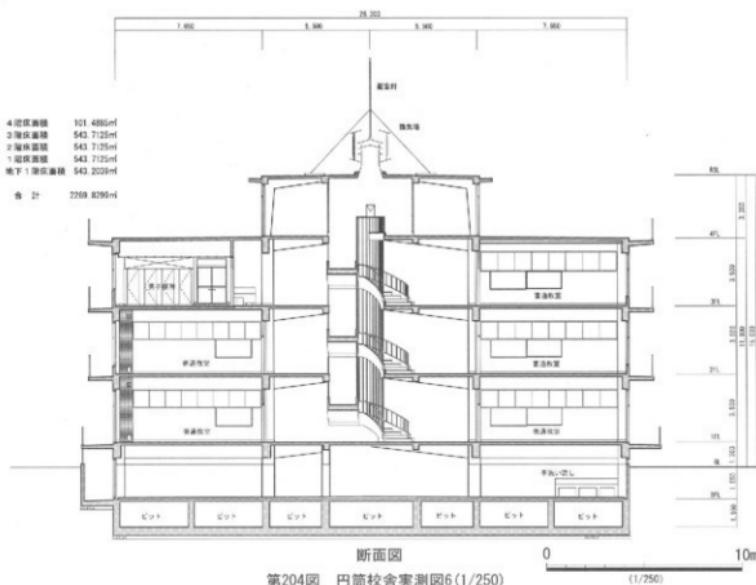
屋上平面図

第203図 円筒校舎実測図5(1/250)

通常の校舎のような玄関部分が全くなく、各教室へは主に外側の開放廊下から直接出入りするようである。教室を通らずに中央のホール・螺旋階段へ行くには、西側北よりのホールを通るルートしかない。この西側のホールの出入り口は教室と同じアルミサッシの引戸で、特に出入り口としての区別はない。どのフロア、教室も土足で外側から自由に行き来する構造といえる。



写真 34 3階階段室



第204図 円筒校舎実測図6(1/250)

中央ホールは床モルタル下地に塗床仕上げ⁽⁹⁾、壁、天井EP塗り⁽¹⁰⁾である。径11.0mの空間で中央部に螺旋階段を配置する。2階、3階は螺旋階段部分が吹き抜けとなるため、銅管製OP塗り⁽¹¹⁾の手摺りの付いた廊下状の空間となる。西側ホールも中央ホールと同じく、床モルタル下地に塗床仕上げ、壁、天井EP塗りで、北側が階段となっている。

教室は56°の角度の扇形で、すべて同じ平面形である。床は、1階の教室の一部にフローリング貼りやフリー・アクセス・フロア⁽¹²⁾を設置した部分があるが、基本的にはPTタイル⁽¹³⁾貼りである。壁はモルタル下地にEP塗り、一部合板OP塗り。天井はリシン吹き付けとする教室と化粧石膏ボード張⁽¹⁴⁾とする教室がある。また、1階にはLGS下地壁⁽¹⁵⁾を追加して、室内を分割して利用している部屋もある。両側面の壁と中央側正面に黒板を配置する。中央の黒板の両脇には木製の引戸とスチール製の防火扉があり、黒板裏に収納されるようになっている。教室の窓側の角には換気用とみられる煉瓦積み壁の煙突がある。

便所は40°の角度の扇形平面で、さらに男子用、女子用に二分割している。床はモザイクタイル貼、壁はモルタル下地にEP塗り、一部角タイル貼、天井は化粧石膏ボード張とする。内部にはトイレベース、掃除道具入れ、洗面台を設置しており、出入り口はアルミサッシのドアとする。ドアの外側には人造石研ぎ出し仕上げ⁽¹⁶⁾の水栓柱を設置している。



写真35 教室



写真36 4階階段室

4階・屋上

4階は中央が螺旋階段の階段室、下層階の廊下部分がペントハウス(展望ホール)、ほかは屋上となっている。階段室とホールは木製OP塗り窓枠のガラスで区切られ、床はモルタル塗り、柱や梁、天井はモルタル下地にEP塗りとなっている。展望ホールの外側は全面アルミサッシのガラス窓、ガラス引き戸である。屋上は周囲にスチール製OP塗りの手摺りが付き、床面は全面防水モルタル塗りとなっている。

まとめ

旧市立旭中学校の円筒校舎は、外壁のほぼ全面を窓にし、特に玄関ホールなどを設げず、直接教室出入りする構造で、非常に開放的なつくりである。一般に、円筒校舎は非常時の避難経路が建物中央の螺旋階段に限定され危険といわれるが、外周にペランダ、階段を配置し、各教室から直接ペランダにでることができ、ペランダには外階段、渡り廊下が接続するなど通常より多くの避難経路を確保できメリットとなっていたといえる。

円筒校舎が流行した背景には、建築コストを抑えられるというメリットだけでなく、円筒形という未来的な形が、戦後の新しい時代、新しい教育といった風潮の中で、受け入れられ流行したという面もあるものと思われる。この旧市立旭中学校の円筒校舎も、その独特の外観もあり、旭中学校やこの地区的ランドマークとして親しまれてきた。近年、多くの円筒校舎は築後五十年程を経過し建物の老朽化などもあり、取り壊されるものが増えてきている。旧市立旭中学校の円筒校舎も保存することはかなわなかつたが、戦後復興期の新しい教育を体現する建物として忘れてはならない建築物といえるだろう。



写真37 4階ペントハウス



写真38 屋上

注

- (1)岡山市史編集委員会編 1968『岡山市史』宗教・教育編 岡山市役所。『旭中学校50周年記念誌』(旭中学校創立50周年記念事業実行委員会 1997)には昭和30年10月竣工とある。
- (2)岡山市総務部総務課 1956『岡山市市勢要覧』昭和31年度版 岡山市役所
- (3)リシン吹き付け モルタル下地にセメントやアクリル樹脂をスプレー缶で薄く吹き付けて、リシン仕上げ状にする方法。大理石などを混ぜたモルタルを塗って、硬化前に織柄の工具やブラシでひかいて表面を粗く仕上げたものを「リシン仕上げ」という。
- (4)旭中学校創立50周年記念事業実行委員会 1997『旭中学校50周年記念誌』、注(2)文献
- (5)注(4)文献
- (6)塗床仕上げ モルタルなどの下地にウレタン樹脂、エポキシ樹脂などの樹脂を一定厚で塗布してしあげたもの。
- (7)EP塗り 合成樹脂エマルジョンペイント、主にコンクリートやモルタル面の塗装に使われ、使用樹脂の種類により酢酸ビニル系、アクリル系、合成ゴム系などがある。
- (8)OP塗り 油性調合ペイント塗。顔料をボイル油で練り合わせて、建築物の鉄部や木部などの仕上に用いる。
- (9)フリーアクセスフロア 電気・通信配線、空調設備等の機器を収納するため床を二重構造としたもの。
- (10)Pタイル タイルのように薄い板状のプラスチック系床材。
- (11)化粧石膏ボード張 最も一般的な天井用化粧石膏ボード。通称ジブトーン張りともいいう。
- (12)LGS下地壁 軽量鉄骨間仕切。鉄筋コンクリート造などの建物の構造に関係ない間仕切りに用いられ、非常に薄い軽量鉄骨の下地に石膏ボード等が貼られて壁となる。
- (13)人造石研ぎ出し仕上げ 表面仕上げ層に粗石を混入したモルタルを上塗りし、その表面を研磨することにより石の素材感を出す工法。

付章2 岡山県女子師範学校の記憶

はじめに

発掘調査では、戦災に伴う瓦礫層下から、当時その場所に存在していた岡山県女子師範学校(昭和18年4月からは学制改革により「岡山師範学校女子部」と改称)の玄関・食堂・寄宿舎等の一部が検出され、当時そこで使用されていた食器や文房具などの遺物も出土した。

今同、藩学校以後この地に設置された岡山県師範学校および岡山県女子師範学校(以下、「女師」とする)についての文献調査も行ったが、特に女師の記録は岡山空襲で学校自体がほぼ完全に消失していることから、現在残るものはごくわずかであり⁽¹⁾、戦時中から戦後にかけてのこの地の様相を知る手がかりとなる資料もごく限られたものであった。

発掘調査に際して、戦時中に女師の生徒であった方々に現場を見ていただき、先の遺構の具体的な証言や、遺物の同定を進めた一方、当時の学校の様子や寄宿舎生活について多くの記憶が伝えられた。それは今から60数年前の記憶であるが、つい近年の出来事のように話され、わずかに残された文献や、話者相互の記憶ともほとんど食い違わないなど、これらの証言は資料的にも成立する内容であると考えられるものであった。

このたび、こうした記憶を風化させることないよう、これを機に聞き取り記録として併せて残すべきものと考え掲載することとした。この証言も、話者自身が10代後半を中心とした多感な時期の記憶であり、客観的な出来事として捉えるにはなお不十分な感の残るものもあるが、空襲によって灰燼とした母校を偲ぶ彼女にとって、記憶の中にのみ存在する青春の姿である。頁数の許す範囲でその記憶を残しておきたい。

本稿の証言をしてくださったのは、昭和17年4月入学、昭和19年3月卒業の岡山県女子師範学校第二部生徒4名である。証言は、第4章第1節に掲載した『記念誌』付図「岡山県女子師範学校平面図」や、当時のわずかな写真などを手元に、座談会形式で記憶の赴くまま話していただいた⁽²⁾。

1 女子師範学校での生活

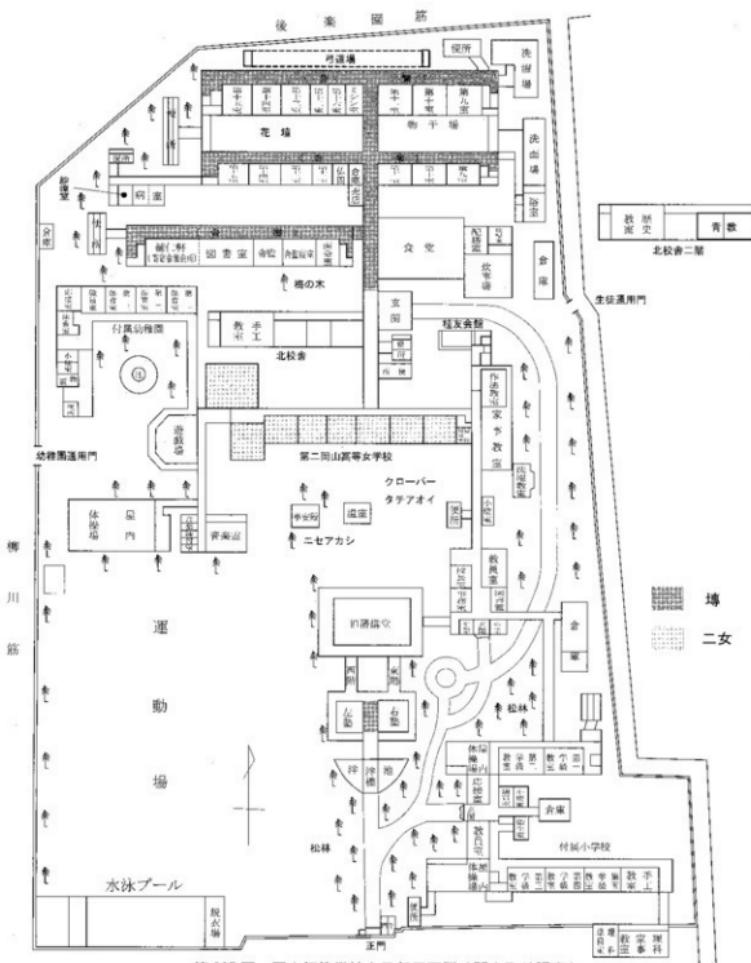
a) 入学

修行年限

女子師範学校は、学校令によって尋常高等小学校卒(14歳)が師範第一部(修行年限5年)に入學するコースと、尋常小学校卒(12歳)から高等女学校(修行年限4年または5年、4年から受験ができた。以下「高女」という)に進み、師範本科第二部(修行年限2年)に入學する二つが主な進学方法だった⁽³⁾。昭和18年の学制改革によって官立の専門学校程度に昇格してからは、予科ができ、予科2年・本科3年の年限だったが、昭和20年3月の卒業生は繰り上げ卒業で、女子は本科2年で卒業となった。予科は高女2年で受験資格があったが、およそ高等小学校⁽⁴⁾卒業(満14歳)後に予科へ入学し、女師で5年間勉強するのが普通だった。

入学試験

女師では、入学試験は3日間続けて行われ、郡部からは泊りがけで来ていた。



第205図 岡山師範学校女子部平面図（聞き取り調査）

その日ごと夕方に合格者が本館の玄関(校長室や応接室などのある建物の玄関)に張り出され、合格者のみが次の日の試験を受験することができた。1日目、2日目の試験でかなりの人数が落とされていた。試験は1日目が学科(国語・算数・理科・社会)、2日目が実技と口頭試問、3日目が身体検査だった。2日の実技は、歌・体操・裁縫で、歌は「天長節」の歌の途中から伴奏もなしで歌わされ、また机の上で手を広げる試験があった。歌の試験は、女学校で「四大節」の歌の中から出るとは聞いていたが、途中から歌うので音がとりにくかった。体操は屋内体操場でボールを使った運動で、体操服に着替えてやった。裁縫では布切れが出て、棊先を縫線に縫う実技があった^{⑤)}。3日日の身体検査では、目の悪い人は目薬

をして試験を受けていたが、トラコーマなどに罹っている人の合格は難しかった。

志願者は第二部80人の定員に対しておよそ倍ほどであったようだ。私立の高生徒もいたが、県立の高女出身者が多く合格した。

女師の志望理由は特になく、たいていは両親の意向だった。それは戦時中のことでもあり、高女を卒業すると、女子挺身隊にとられたりして、どこにやられるか(行かれるか)分からぬが、師範に行けば卒業して教員になっても、県内のどこかでの就職ということで、心配がなかったから、という。また、県外の専門学校も志望したが、県内なら会いに行けるから、と両親に勧められた。

b) 生徒とクラス

学年と定員

1クラスは40人が定員で、病気などで休学する人、学年を下がってくる人らの異動もあったため、だいたい38人前後であった。第一部が1学年1クラスずつで計5クラス、第二部が学年2クラスずつで計4クラス、専攻科⁽⁵⁾が15~16名の1クラス、計10クラスであった。

1年時(昭和17年度)の学年では、第一部が1クラス40名、第二部が「い組」「ろ組」の2クラス計80名で、学年合計120名だった。2年時には学制改革もあり、第一部・第二部を混ぜて1組・2組・3組となった。

共同利用の学校

女師のほかに幼稚園(幼稚園保母養成講習会)⁽⁷⁾が20人ほど、また二女(岡山県立第二岡山高等女学校)⁽⁸⁾が併設されており、これが5学年各1クラス、青教(岡山県立女子青年学校教員養成所)が2クラス(修学年限2年、学年各1クラス)21人ほどがいた⁽⁹⁾。

c) 建物(校舎・寄宿舎)

入口・通路

入り口は南にあった旧藩校の校門が正門で、正門扉は「オッパイ釘のギー」と呼ばれた。電灯は付いておらず、夜は真っ暗だったようだ。ほかに東側の寄宿舎玄関の近くに寄宿舎への通用口があつたが、ここは板戸の門だった。西側の幼稚園舎脇にも幼稚園の通用門があった。いつも開け放しで、どこも門衛とかはないなつたが⁽¹⁰⁾、夜になると閉めていたのかも知れない。女師や二女の生徒の通学は、正門からではなく、東側の通用門(寄宿舎の通用門)を使っていたようだ、その先に生徒用の玄関(寄宿舎の玄関と同じ)があつた。北側には入口はなかった。蘭舎の北側は寂しい所で、夜になると気持ちが悪かった。周囲の匂いは、柳川側はコンクリートの塀で、運動場と外を仕切っていたが、他は板塀で、寄宿舎のあたりも板塀だった。コンクリート塀や板塀がそれぞれどこまで続いているかは覚えていない。どちらも背が届かないくらい高い塀で、中は見えなかった。

教室や寄宿舎の廊下は屋根のある渡り廊下で、寄宿舎一階の廊下には赤い塙が敷き詰められ2階は板張りの廊下だった。教員室と小学校の間の廊下はコンクリートだった。

旧講堂と右塾・左塾の間の通路は土で、玄関から運動場へ出る時には、ここが通路になっていた。右塾・左塾の間の通路は塙が敷かれ、建物はいつも閉まっていた。

校舎・教室

教室は「本校」と呼び、「附属」(小学校・幼稚園)や寄宿舎と区別していた。(写真39)

教室の建物は赤い屋根で、廊下は板張りだった。教室のうち物理教室は階段教室で、ほかは普通の

1 女子師範学校での生活

平たい床の教室だった⁽¹⁰⁾。梅舎西端の輜仁軒は、集会所として使っていた。東側の図書室とつながって一部屋だった。ここで自習をしていた。

儀式や式典では教員室の二階にあった講堂を使い、旧講堂は使わなかった。講堂へは細いらせん階段を上がっていく。ここで辻久子さんのバイオリンの演奏を聞いたことがある。

校庭

校門から旧講堂・小学校玄関の付近は松林だった。園に斜線のある庭は土庭で、梅舎の南には梅の木、蘭舎の南には花壇があった。旧講堂裏の庭にはクローバーが生えており、タチアオイがあった。奉安殿は西に向いてあり、その周囲にはニセアカシがいっぱい植えてあった。

旧講堂（写真40）

旧講堂は、黒い瓦が葺かれていた。旧開谷学校とよく似た感じだか、屋根は暗かった。中にはグランドピアノがあった。夜に勉強をしたりするのに使った。ここで座禅をする先生もいた。

その他

寄宿舎は梅舎・菊舎・蘭舎の3棟あったが、梅舎は二階だけが宿舎で、一階は教室だった。菊舎が一番大きかった。部屋は畳敷きだったが、その畳は柔道場にあるような七島蘭の、縁のないものだった⁽¹⁰⁾。寄宿舎の廊下には防火用のバケツが置いてあった。頑かに歩いていたのだろう。寄宿舎には倉監室やミシン室、仏間もあった。

水泳プールの外観は背大くらいの高さがあった。女師の授業では使用したことなく、附属小学校の授業で使用していた。屋内体操場には、肋木などがあった。

昭和16年に完成したといわれる二女の研究科の建物については、あったかどうかは覚えていない。二女の教室に行くこともなかったので、分からぬ。

d) 授業

教室割り

本校の南校舎は二階が女師、一階全部が二女、北校舎一階は女師で、二階東には青教が2部屋ほど入っていた。教室は自分のクラスというのではなくて、自分の席というのもなく、椅子に座布団を敷くということなどはなかった。

音楽練習室は5部屋あり、それぞれにピアノがあったが、みな競争で取りにいっていた。

授業内容⁽¹⁰⁾

授業では教室の移動はなかった。



写真39 本校の廊下（附属小学校の廊下？）
創立30周年記念の表紙がある
(昭和7年『桂の友』第35号より)



写真40 旧講堂内部 創立30周年記念式典風景
(昭和7年『桂の友』第35号より)

授業は現在の3学期制と同じで、「庭のタチアオイが咲いたら夏休み」と、帰省を心待ちにしていた。授業は教科担任が行い、担任の先生とは会わない日もあった。内容は先生によっていろいろだった。数学の先生や書道の先生は、勉強らしいことをほとんどしなかった。とくに書道の先生は、墨を握って待っていても結局2年間、授業ではほとんど書かなかった。時に後ろのほうの席で書いている生徒がいると「ちょっと筆を置きなさい」と言われ、ひたすら四方山話(処世訓?)をされていた。

漢文は2年生の時に初めて習った。それまで習ったことがなかった。手工の時間には、鉋や鋸を使つた。何曜日かの午後は増科の日で、ずっと授業だった。音楽・図画・工作があった。高女に比べ、習うことが多かった。英語の授業はなかった⁽¹⁰⁾。裁縫の時間は少なかったが、1年生の時には洗濯の稽古、伸子振り⁽¹¹⁾をした。洗濯の実習は、寄宿舎の洗濯場は使わず、家事教室、洗濯教室で行った。2年生ではミシンで単のレインコートを縫つたり、師範の制服も縫つた。

調理実習では、2年生の秋にイナゴを料理する実習をした。茹でて干したものを持って、擂鉢で粉にして食べた。佃煮にはしていない。また、ロールキャベツを買ったこともある。

桂友会館は畠の部屋で、附属の研究会などの時には卒業生が泊まっていた。また、卒業する直前に、授業時間外の夜に先生方を招いて、接客の実習ということで、料理やお茶を出したことがある。

教室の様子

教室の机は椅子と引ついたもので、背の低い人が前の方に座っていた。掃除の時には、机を前から勢いよく押すと、サッと後ろへいっぺんに動かすことができた。

行事・その他

入学式には親が来たが、卒業式(昭和19年3月19日)には親は来ていない。

記念写真は、たいてい紀元節の日に、いつも同じ場所で撮った。卒業写真は1組、2組、3組と、組ごとに撮った。(写真41)

期末試験はあった。成績簿もあり、2年生のときに個別指導があった。

2年次(昭和18年度)には、官立の学校となつたため、実技の先生を除いて多くの先生が代わり、人もかなり増えた。また、教授・助教授と呼ぶようになった。

部活動は、第一部の生徒はバレーボールをしていた。第二部は、その人数の穴埋めや、テニス、弓道をしていた。対外試合では、1年生の時は高女と同じ立場での出場で、出身校と対戦すると相手側が「先輩とはやりにくい」言っていた。2年生の時に女剣が官立となると、試合は全国大会への出場となつた。弓道でも全国大会へ出るグループもあったようと思う。

二女の生徒は他の高女同様、通学・弁当持参⁽¹²⁾、教室も異なつていたので、ほとんど顔を合わせることはなかった。また青教の生徒ともあまり会うことはなかった。青教の先生は、作法室に泊まり込んでいた。

朝礼では、音楽係の人は、前に立つて先に歌うと、その後から一斉に併せて歌つた。

e) 学校生活

掃除

教室の掃除は皆でしなかつた。クラス40人が一度にしたことはない。



写真41 卒業写真
後ろ2列が卒業生。制服がそれぞれ異なる。後方に奉安殿と本校
(昭和19年2月11日)

特殊教室もしたことがない。トイレの掃除も、寄宿舎ではしても、本校ではしたことがない。廊下や階段などの公の場所は、誰がしたんだろうか。

師範学校の『校務諸規程』(昭和16年3月)に見られる内容から

(夏季冬季心身鍛錬作業について)学校では大掃除をした覚えがない。

(作業週間及び第七時限授業)作業はなかった。本校ではしていない。寄宿舎では水道管を直すなどの作業はしていた。

(自粛会について)1年生の時は、上級生に(委員を示す)青色の名札を付けた人はいた。同級生にはいなかった。1年生では、クラスでは班が分かれしていても、班長はいなかった。2年生の時には、班長はあって、特になにもなかった。

海水浴・乗馬訓練・軍事教練・農場実習など

海水浴は、1年生、2年生一緒に宝伝に行った⁽¹⁶⁾。師範教育の特別訓練の一環だったようで、全員参加だった。1年生の時は東宝伝、2年生の時は西宝伝に行き、民宿に泊まった。遠泳の練習もしたが、50メートルも泳いでいないと思う。海水浴では、水着もそれぞれで、決まっていなかった。(写真42)

2年生の時には、乗馬の実習があった。東山の乗馬クラブ⁽¹⁷⁾で、1日か2日、学校から行った。何頭か馬がいて、一人ずつ押し上げられて乗ったが、ぐるっとグランドを一周しただけだった。(写真43)

2年生の時に、男子部⁽¹⁸⁾でロープで引っ張るグライダーにも乗った。クラス毎に行ったと思う。

男子部では軍事教練もあって、作業服(もんべ)で学校から歩いて行き、竹槍を突く訓練もした。女子部には教練の道具などはなかったので、男子部にはよく行っていた。男子部の人が女子部に来ることはなかった。狭かったからだろう。

農場での実習も時々あった。宇野の農場は、東に一女⁽¹⁹⁾が見える位置、現在の西川原の就実大学あたりで、砂場と言っていた。祇園用水が西側の真横を流れていた。学校から農場へは、鶴見橋、後楽園北側の蓬莱橋を経て、祇園用水沿いに行った。リュックを背負い、大八車を押して、野菜作りを行った。鎌を使ったり、水やりをして豆(落花生?)などを作っていた。

運動会

旧講堂の西の縁側にオルガンを並べて、「音楽係」の生徒が、クラスごとにマーチなどを演奏し、それに合わせて行進した。

運動会は、女師單独でやっていた。附属(小学校)は附属でやり、二女とも合同ではしていない。また青教、保母が体操をしたのも見たことがない。また、競技(演技)についても、現在のような競争的なものはした覚えがない。

空襲の備え

1年生(昭和17年)の4月に、岡山で最初(?)の空襲警報が出た⁽²⁰⁾。この時には被害はなかったが、本校の裁縫室にいて、裁縫の机の下へ逃げ込んだ



写真42 海水浴
(宝伝にて 昭和17年7月21日)



写真43 乗馬実習
女師で製作したモンベを着ている。
(岡山市奥市の乗馬クラブ 昭和18年)

だのを覚えている。学校では特に普段は備えもなく、寄宿舎には防空頭巾を置いていたが、本校にはなにも持つて行かなかった。

2年生の時(あまり寒くもなく、暑くもない時期)、寄宿舎で消灯の後、寝床に入っている時に、前触れもなく避難訓練があった。非常ベルが鳴り出し、みな寝巻きの上に作業服のもんべを着て、防空頭巾を被って柳川に沿って南方の方面へ(北上して)

行った。下級生の一人が服の紐をうまく結ぶことができず、泣いていたのを手伝ったことを覚えている。

教育実習

2年生になると、各クラスごとに教育実習を行った。実習は附属小学校で4月半ばから行なった⁽²¹⁾。それまでは代用附属小学校で行なわれていたが、この年からしばらく附属小学校で実習のち、「地方実習」として、各地の小学校で行なった。

昭和18年度の地方実習は、5月頃から始まり、1組は海辺の児島郡甲浦村飽浦(現・岡山市飽浦)の甲浦小学校へ、2組は山間部(真庭郡美和村目木の米来小学校)へ、3組は吉備郡眞金町(現・岡山市吉備津)の鯉山小学校へと割り振られた。甲浦小学校では10日間、学校で泊まった。実習生35~6人で、最後の日に写真を撮った(写真44)。米来小学校では、大きな農家にクラス全員が泊まった。教生で1日だけ附属幼稚園に行なったこともある。

f) 制服・服装

制服

入学した頃、第一部の生徒(昭和14年度入学)は、既製品の女師の制服を着ていた。この制服の上下は紺色のサージで、白のキャラコのような素材のブラウスに、浅葱色のような、薄いブルーのネクタイだった。第二部の生徒(昭和17年度入学)は既製品の制服がなく、1年生の時には、高女の制服(紺サージのセーラー服)を、襟をヘチマ襟に仕立て直してもらひ着ていた⁽²²⁾。女学校では3~4年生の時に縫い返しの練習をしたので、セーラー服を裏返して縫い返すことくらいは簡単にできた。腰の部分はセーラーでは短いので、別の服の布を付け足して、上着を作ったと思う。(写真45)

2年生では制服として、紺色の作業衣に白い襟を付けたような、自分で縫った服を着た。前を留めるボタンはなく、腰の紐で留めていた⁽²³⁾。教生の実習では着て行っていないので、地方実習が終わってから、おそらく2学期に授業で作ったと思う。袖を縮めずに、まっすぐにダーツを取っていた。

卒業の時には、配給でもらった紺色のサージ



写真44 地方実習を終えて
後列白衣の服が生徒。微妙に肌の色・形が異なる。
(半津国民学校にて 昭和18年6月29日)

写真45 ヘチま橋の女師の制服
腹は右前合わせ、胸にピン止めの校章と「国民禮章」の「祝章」を付ける。(昭和18年3月6日「地久節」記念)

布を自分で縫って制服を作つて着た(写真46)。

スカートは箱ヒダが二つ付いたものだった⁽²⁰⁾。夏服は、白いブラウスに白のネクタイだった。

二女ではスカート丈を検査されていたといわれるが、師範ではそのようなことはなかった。

体操服は揃いではなく、白い上着にぼうとりとしたブルマで、帽子はなかった。(写真47)

校章は、金属がなく、刺繡の直径3センチくらいあるのを付けていた。

作業着

学校の掃除の時や、勤労奉仕に行く時には、自分で縫ったつなぎのもんべを着ていた。当時木綿がなく、メイセンの着物で作った。股引を後ろでくるくる形のもんべとエプロンが一緒にになったようなもので、もんべをはいた後、前方からエプロンのように上着部分をあて、腰紐を後ろで交差させ、その端を上着部分の両脇に空けた穴から前へ通し、その紐を前でくくった。みな型は揃っていたので、たぶん学校で大・中・小小さいの型紙があったのだろう。

師範帽

生徒の髪型は決められていた。「師範帽」と呼ばれており、髪を頭の後ろで一つに束ね、ヘアピンで留めるものだった。髪が短いと、髪の先がビンビンとはねていたが、長くなってくると、毛先を上に丸めて盤を作る。ビンを多用してツルリンとなるようにするのが良かったが、なかなか出来なかった。また盤を分けたり、編んだりすることはなかった。街を歩いていても、女教師の生徒はすぐに分かった⁽²¹⁾。

履物

校内での履物は、草履や運動靴状の上履きで、靴やスリッパではなかった。外歩きの靴は下駄箱に入れていた。授業には、寄宿舎から上靴で行った。高女では綿の長靴下が1足50銭⁽²²⁾、革靴も制服となっていたが、女教師では特にきまりはなかった。夏は裸足だった。

g) 勤労奉仕

部隊奉仕は、学校に命令があり、それをクラスごとに割り当てた。



写真46 卒業式の日
手には卒業証書。制服は「女子標準服」、胸に「国民儀礼章」と胡蝶の校章を付ける。
(洋池にて 昭和19年3月19日)



写真47 体操服
(本校の前で 昭和18年)

連隊の門⁽²⁷⁾を入ると、衛兵に「挙げ筒」をされ
て恥ずかしさや驚きもあり、「まあ、えらいところへ来たなあ」と思った。衛兵は手足を高く上げて歩いていた。1年生の時には、三軒屋の陸軍兵器廠に行った⁽²⁸⁾。掃除をしたように思うが、ボタン付けなどの縫い物はしたことがなかった。奉仕には弁当を持って行ったが、部隊で小さなアンパンが出たのが嬉しかった。学校から柳川を北上し法界院(旧国鉄津山線の法界院駅)まで歩き、そこから三軒屋への列車(兵器廠への引き込み線)で行った。

部隊奉仕では、三軒屋にも行った。そこでは、ボタン付けをした⁽²⁹⁾。2年生の時には三軒屋や連隊での部隊奉仕はなかった。2年生の時には、現在の県立工業高校の辺りにあった衣糧廠に行った⁽³⁰⁾。海軍のネイビーのダブルのコートの金ボタンを付けた。それらは学校に持ち帰って縫つたことはない。

慰問

陸軍病院の慰問は、女師では行っていない。

勤労奉仕

勤労奉仕では、1年生の時に田植えや稲刈りに出た。稲刈りは、鹿田町を歩いて、芳田^{よしだ}へ行った⁽³¹⁾。学校から農家まで手製のリュックを持って、自分で縫つたつなぎのもんべを着て行った。リュックは、肩紐を両肩に通した後、左右両方の紐を別の紐を使って胸の前で括っていた。芳田小学校に集まると、農家の人が呼びに来た。班列(1クラス3班で、あいうえお順に何人かずつを一つの班とした)ごとに農家へ行って、稲刈りをした。

教生が終わってから、藤田や妹尾⁽³²⁾にも勤労奉仕へ行った。担任の先生と一緒に、例のもんべを着て電車に乗って行き、宇野線の妹尾駅で降りた。農家の勤労奉仕は日帰りで、お昼には農家から白いおにぎりが出た(写真48)。工場での勤労奉仕はなかった。

h) 寄宿舎の生活

部屋割り

寄宿舎は南から梅舎、菊舎、蘭舎の3棟で、それぞれ二階建てだった。部屋は1室が20畳で、1部屋に10名くらい(昭和17年度には、基本的に第一部各学年1名ずつ計5名、第二部各学年2名ずつ計4名、+α)おり、室長を決めて生活をしていた。2年生の時(昭和18年度)、予科と本科の生徒を分けたのか、同室には予科生はいなかった。本科の生徒は1・2年生ばかりで年齢差がほとんどなく、やりよかったです。この年には専攻科生徒の部屋も用意された。

寄宿舎では、舍監の先生よりも上級生のほうが怖かった。上級生が気を使ってくれた。

二女の生徒が寄宿舎に入った(寄宿した)ことはないと思う。時には助教(代用教員)や校長の訓練などで、女師の生徒以外が泊まることはあった。

寄宿舎の部屋は、梅舎の第1・2室が専攻科生徒に充てられ、菊舎の第14・15室は脳チフスの生徒に充てられていた。蘭舎の第16室はアイロン室で、菊舎の第16室は仮間だった。蘭舎の物干場には屋根が



写真48 勤労奉仕
女師で作ったつなぎのもんべを着ている。また、
埃除けに防塵頭巾をかぶっている生徒もいる。
(昭和17年秋、芳田村)

あり、雨の日の物干し場だった。

寄宿舎の部屋替えは、年に1～2回だった。

学校近隣の通学可能な生徒でも、基本的に全員寄宿舎へ入った。しかしながら当時の女師では、県下の教員に対しての各種の教員研修もやっていたため、その参加者が宿泊を要する場合は、宿舎に割り当てるため、寄宿舎を少しでも空けなければいけなかった。その都度、通学の可能な生徒は寄宿舎(梅舎)を追い出され、自宅から通学をさせられていた。

入寮

布団は持ち込みだった。寄宿舎に入る際に、

柳行李に入れていた。父と自分それぞれの自転車に、父は布団を、自分は荷物を荷台にくくって持つていった。また、着物、羽織を持ってくるよう言われたが、なかつたので衣料切符で買ってもらったのを覚えている。

寄宿舎に入る際に、両親の写真を持って来るよう言われ、室長はその写真を額に入れて部屋の上方へ吊っていた。下は棚(およそ幅1間、奥行きが半間ないくらいの、部屋に突き出た形)になっており、棚の下は服を掛けるところで、その前にはカーテンが掛かっていた。毎朝食事前に、室長の号令などに合わせ皆で写真に向かって「おはようございます」と挨拶をし、寝る前にも寝間を敷いた後に挨拶をした。(写真49)

室長は、部屋割りが発表されるときに先生が決めていた。室長は部屋が代わるたびに決められていた。

同室となった第一部の生徒は、まだ年も小さく(12～13歳くらい)、親切さでよく寂しがっていた。かわいかった。郡部から来ている生徒もあり、柳川筋の路面電車を見て「怖い、怖い」と怖がっていた。しかし5年も寄宿舎にいると、第二部の生徒に比べて性根が座っていた。

寄宿舎では、時々泣いている生徒がいたが、おそらく家が恋しくなって泣いていたのだろう。

高女卒で入った第二部の生徒は、1年生の時にはわがまま放題、2年生になるとしゃんとした。

一日の生活(表7)

寄宿舎では朝6時に「リーン」と大きな音でベルが鳴って一斉に起床、夜10時に消灯だった。

起きるとすぐに廊下へ出て、寝巻きの上半身を下ろして乾布摩擦をした。放送の音楽が鳴って、ゆっくりと5分か10分くらいやった。時々舍監の先生が後ろを歩いて見回っていた。

洗面所には長い流しがあり、部屋ごとに蛇口が三つくらい割り当てられ、その上には洗面器を置く棚があり、置き場所も決められていた。一斉に行っていたが、押し合うほどではなかった。

朝食は7時頃から一斉にいただいた。その後は登校まで部屋に戻って休憩をした。

朝礼は、時々、月曜日くらいにあった。「金剛石」の歌を歌った。朝礼は女師だけやって、二女や青教と一緒にした覚えはない。

登校の時間になると、寄宿舎の部屋から、午前中に必要な道具を布の手提げに入れて、本校へ行った。教室の机の右側には手提げをかけるフックが付いており、そこに掛けている。

昼食は教室から食堂に行きいただいた。食後は寄宿舎の部屋に戻って休憩をした。

午後の授業時間になると再び本校で授業があり、終わると教室を掃除した。教室の掃除は、床をモップで拭いたようだ。雑巾掛けをした覚えがない。教室以外の場所は交代でやったのかどうか覚え



写真49 寄宿舎にて
背後に屏風、左に棚、その上に両親の写真を入れた額が掛かっている。生徒は寝間袋、寝間品を手にしている。
(梅舎にて 昭和18年)

ていない。寄宿舎の廊下、博の上は雑巾を挟んだモップのようなものでやった。

放課後や日曜日には洗濯物をした。洗濯物は外には干さず、洗濯場の中にロープを張っているところや、洗濯場のすぐ南の場所に干していた。図にある物干場も使ったように思う。洗濯物は、毎日はできず、同じ服を数回着ていた。

夕食は午後6時からで、その後入浴だった。入浴は、石鹼が配給でタオルも貴重だった。早いうちに入らないと、きれいな湯ではなかった。日曜日には髪を洗った。風呂場での洗濯はできなかつた。

午後8時ごろからは、1時間勉強時間だった。私語をやめて勉強することに専念した。部屋でも、輔仁軒でもどちらでもよかつた。部屋には二つの電灯があり、夜にはそれの下で左光線になるよう、机を矢車にならべて勉強をした。この机は、入学の際にみな斡旋を受けて買ったもので、ベニヤ板を張ったようなものだつた。一緒に小さい本箱も買った。机は勉強のとき以外は窓辺や壁沿いに寄せていた。本箱は廊下側の窓際に並べていたが、腰板が高く、本は皆だいたい同じ高さだったのできれいに並んでいた。勉強時間で体調の悪い人などは、部屋の隅で横になっていた。勉強時間には舍監の先生がスリッパの音を立てて、櫻中電灯を持って回ってきた。「来た、来た」と小声で言いながら勉強をした。

寄宿舎入寮時(昭和17年)には、上級生に「舍長」が一人いた。毎日就寝前、午後9時30分頃から、寝巻きに着替える前に食堂へ集合して動静報告があり、部屋ごとに「帰宅・入院・病臥」など、舍長が点呼をとって舍監に報告をした。翌年(昭和18年度)には舍長はいなかつた。

点呼の後、部屋へ戻ったら各自就寝準備。クリームなどは寝る時にはしていた。乳液や化粧水をつけていた。化粧はしなかつた。布団の敷き方や順番は部屋ごとに決めていたようだ。

消灯後は、舍監が懐中電灯を持って、歩いて回っていた。布団を被って隣の人と話をしていると、上級生に「もう黙って寝よう」と叱られたことがあった。よく「ガリ勉は便所の灯りで勉強をする」とか、「寝間の中で布団を被って懐中電灯で勉強をした」とか言っていた。

部屋での生活(第206図)

部屋の前後には出入り口があり、入ったところが一段低く、靴を脱ぎきする場所で、靴箱があった。寄宿舎の部屋以外では、運動靴のような上履きで生活をしていた。部屋は全体に畳が敷かれ、板場の部分はなかつた。

寄宿舎では、陰湿ないじめや、他人のものをこそこそと隠したりする生徒はいなかつた。寄宿舎生活では、上級生に気兼ねがあった。またお喋りをしていると、舍監の先生にきつく叱られた。今思えば、将来先生になるという意図を考えてのことだったのだろう。

6:00	6:00 起床。全員廊下に出て、上半身裸になり乾布奉致。部屋の中で制服に着替え。洗面所で歯磨き、洗面
7:00	7:00 鮎食 休憩、部屋掃除など
8:00	8:30 各日、部屋から本校(教室)へ 午前中4校時の授業
9:00	
10:00	
11:00	
12:00	12:00 食堂へ、部屋ごとに並び昼食 食後は部屋へ戻り休息
13:00	13:00 午後の授業 2校時ほど
14:00	
15:00	15:00 授業終了(放課後) 教室の掃除(一齊にはやつていなかつた)
16:00	宿舎へぼらぼらで帰る。各自自由時間(自分の部屋の掃除・内会・外出・洗濯など)
17:00	17:30 開服
18:00	18:00 夕食 休憩
19:00	19:00 1時間、宿舎での学習時間
20:00	
21:00	21:30 食堂へ集合・点呼。点呼終了後、部屋へ戻り、寝巻きに着替え、寝間を整くなどの就寝準備
22:00	22:00 消灯・就寝

表7 女子師範生の日課

布団のシーツは、入学時にはあった。シーツは休みの日には実家に持つて帰って洗っていた。後に布が配給制になってからは、シーツを母が縫う側のカーテンで縫ってくれた。

押入れは上下二段あり、布団と柳行李、持ち物をまとめて入れた。奥の方へ柳行李、手前に布団を入れた。上の段の人は奥の方まで手が届かず、下の段の人も這い入るようにして荷物を取っていた。

寝巻きは着物だった。夕食の時は服装は着物でもよく、自由だった。

冬には火鉢が一部屋に1個ずつ、割り当てられた。炭をどうしていたかは覚えていない。火鉢にやかんをかけた記憶はない。寒くなると、錦入れの羽織を着ていた。(写真50)

部屋には屏風が1枚あり、この裏で着替えをするのが女のたしなみだった。また押入れの荷物を出し入れたりする時も、押入れの前に屏風を立てて、その向こう側で荷物を開けていた。

その他

先生の退任のときや、卒業のときには食堂で送別会をやった。

電話はあった。手回しの電話だった。郵便物は舍監室の前に部屋ごとに分けて置く所があった。書留郵便などで印鑑の必要な時には呼び出しがあった。

売店では、文房具や日用品が売られていた。朝、学校へ行くとき、昼に寄宿舎へ戻ったとき、午後もいつも開いていた。店番には、後に青教へ行かれて学校の先生になられた方がいた。

節分には、舍監の先生が各部屋を回って、農場で作った落花生を撒いてくれていた。落花生なら、後で拾って殻をむいて食べることができた。

現在の県立美術館のほうへ行く上り坂の途中に化粧品屋があった。第二部の人よりも、第一部の人の方が(買ひに行くのは)多かった。第二部の人は、日焼けをしても平気だった。

輔仁軒で稽古をして、1年生の時に「赤穂浪士」をやった。紙でちょんまげを作り、実家の父親の黒紋付を借りてやった。(写真51)

寄宿舎暮らしは、よい人たちと修行をしたと思う。



写真 206 図 寄宿舎部屋間取り図(復元)



写真 50 寄宿舎にて 火鉢を囲む
背後に屏風、後方に自習机、ガラス蓋の付いた電球がある。
(菊舍第14室にて 昭和17年12月)



写真 51 送別会の練習
この直後に食堂で本番を行う。(輔仁軒にて 昭和17年)

食事

炊事場には1銭を入れると着火するガスがあり目玉焼きをした覚えがある。ゆで卵をした覚えはない。食器は茶碗やお皿にはみな緑色の線が入っていた⁽³³⁾。やがてベークライトの黒いお椀になって、不自由になった。

食堂にはピアノがあり、団欒の場でもあった。送別会を食堂でしたことがある。

鐘が鳴ると、朝と夕の食事では食事当番が部屋から一人ずつ食堂へ行き、配膳(食器並べ、盛り付け)をした。当番のことを「おひつたき」といい、おひつのご飯を一粒残らず掬い取って、同室者に食べさせる役割もあった。食事当番は、学年の上下関係なく、順番に当番をした。食後は、食器を返却したら、食堂のモトムラさんが洗って、煮沸をしていた。2年生の時にはお櫃がなくなり、ベークライトのお椀に盛りきりとなって、ご飯のお代わりができなくなった。

出される食事は普通のご飯(白米)だったが、少し麦かコーリャンが入っていた。毎日ではないが、玄米やコーリャンもあった。1年生の時は、部屋ごとに並んでお櫃が一つずつあった。食事は、ご飯、おかず、汁物、お茶だった。おかずは、筍が出だしたら筍がよく続いて出て、顔がかゆくなっていた。蕩なども出て、残したら室長が「食べなさい」と言っていた。おかずは他にフカの天婦羅などもあったが、食べると顔にブツブツができた。食事は戦時中でもあり、カボチャが多くかった。ご飯に乾うどんを小さく切って入れ、一緒に炊いたものもあった。食堂のご飯だけでも空腹は感じなかつた。

卒業の頃(昭和19年初め頃)には、ご飯も少なくなったが、麦ご飯はでなかつた。

土・日に帰省などで人数が減る場合などは、予め届出をしているので、混乱はなかつた。

食事では、生徒が全部揃い、準備ができたら、舍監の先生が来て、「いただきます」をしていた。

食堂では朝・昼・夕と食事をしていた。朝は部屋ごとに揃って食べたが、昼・夕は授業などで部屋の全員が揃うこととはなかつた。食事は炊事担当の夫婦と子どもがおり、住み込みで賄いをしていた。

(二女の生徒もお昼に食堂で一緒に食事をしていた、といわれるが)、一緒に食事をしたことは覚えていない。毎日、大勢の生徒が来れば覚えているはずだが…。授業や食事の時間をずらしていたのかもしれない。

面会

親の面会は隨時できた。面会の呼び出しは放送であった。昼休憩で寄宿舎にいる時にも呼び出されたが、本校にいる時には呼び出しじゃなかつた。

家の人が面会に来た時には、同室の人に茹でた卵や、おにぎりなどを持つて来てくれていた。差し入れなどは規制がなかつた。

外出

授業が終わった後、門限まではよく出歩いていた。出かける際には同室者に言ってから出ていた。実家が近所の人は、嫌なことなどがあるとよく帰っていたとも言われる。特に何も言わなかつた。

外出では、天満屋や、天瀬の辺りにあった「お菓子町」へ行き⁽³⁴⁾、かりんとうやヌガーを買っていた。

帰省

土・日には帰省してもよかつたが、その際には親から外泊届けを出してもらい、舍監の先生に呼び出され、外泊を許可された。生徒自ら帰ることはできなかつた。帰校の門限は夕方の5時半だった。

夏休みに帰省する時、行李を紐で縛って寄宿舎の玄間に置いておけば、馬車をひいたおじさんが取りに来て、後日実家まで届けてくれた。このときに初めて行李の縛り方を覚えた。

2 訓導（教師）になって

i) 校医・病室

校医は日赤⁽³⁵⁾の先生で、病室には日赤の看護婦さんが住み込みでいた。当時は集団生活の中での結核の感染を恐れていたため、風邪を引いたり、ちょっと熱が出ても、すぐに病室で診察を受けさせられた。寄宿舎へ入寮する際に、各自が検温器（体温計）を買って、いつも持っていた。前年に寄宿舎で流行した腸チフスの影響⁽³⁶⁾かも知れない。熱が出てると校医の判断で日赤に行ってレントゲンも撮られた。治療に長くかかると校医が判断すると、部屋へも帰らせせず、すぐに親を呼んで帰宅療養を命ぜられた。

j) 在学中の待遇

学費は無料で、官費が月に13円少々出していた。第一部の人は、官費で入学する人が多かった。特に県北の人が多くいた。官費は、直接生徒には渡されず、先生が預って、寄宿舎の費用に充てていたようだ。寄宿舎では、月に一度、全員が15円ほどの家計の報告を、葉書より小さいピラのような紙に書いて、実家にしていた。この不足分は、家から出してもらっていた。

2 訓導（教師）になって

卒業後、初任給が55円（昭和19年度当時）だった。その前年は38円で、教師の待遇がよくなつたのかと思う。給料は、小学校よりも青年学校のほうが良かった。

卒業の際にハンドバッグ、ハイヒール、ネックレスを揃えようとしたが、先っておらず、給料を貰つても買えなかつた。綿靴下も売つていなかつた。貯金をしていても、戦後の新円切り替えで価値が変わつてなにもならなかつた。

就職後は学校に着ていく服がなく、しばらくは女師の制服を着ていた。実家に布があつたので、勤務先の小学校の裁縫の先生に服を縫つてもらつた。また親の縫の着物をもんべに仕立て直した。縫を赤く染めると、白い部分が赤くなつて、きれいだつた。

悪いことをしても、訓導は半官宦待遇だったため、畳の部屋で反省させられた。

女師を卒業して片上の小学校へ赴任すると、20クラスのうち師範出身の先生は久しぶりで「師範の先生が来た」と言われた。あとは高女出身の代用教員の先生ばかりだった。師範出身ということで期待された。教員最初の年（昭和19年度）には高等科女子の担任をしたが⁽³⁷⁾、勤労奉仕では炭俵を背負つて山から国道まで下ろす作業があり、小さい子どもにはかわいそうだった。学校の運動場では大豆を作り、スキを防寒着の中に入れる絹の代わりとして集めていた。イナゴを集めて、茹でて屋根の上に干して食料にしていた。短い芋づるも干して食料にしていた。レンガ工場の勤労奉仕では、土を型に入れて機械で打つ作業をしていた。工場では1日働けば、翌日は休みだった。体育では、高等科や翌年（昭和20年度）に担任した5年生で薙刀を教えたこともある。終戦の時は夏休みで、ずっと家にいた。9月になつて学校に出たと思う。ずっと児童らに終戦のことをどのように伝えるか思い悩んでいた。

甲浦の小学校へ赴任したが、空襲警報があると、すぐに子どもたちを学校の前の山に連れ込んでいた。警戒警報が出ると、町別に担任が引率して家に帰した。男の先生が少なく、女の先生も宿直があった。宿直は奉安殿のご真影を守るためにしていた。8月15日には職員はみな学校にいた。運動場でサツマイモを作つていた。

謝辞

本記録に当たつては、岡山師範学校女子部昭和18年度（昭和19年3月）卒業生の西崎堅子さん、山本操さん、西坂良子さん、池宗寿美子さんにご協力いただきました。また本文中の写真は、出典を示していないものは全て山本操さんの提供です。記して御礼申し上げます。

注

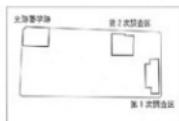
- (1)直接の資料としては、岡山女子師範学校編『記念誌』(岡山女子師範学校、昭和7年)、岡山県女子師範学校ほか編『校務諸課題』(岡山県女子師範学校ほか、昭和16年)、岡山師範学校編『岡山師範学校一覧』(岡山師範学校、昭和18年。以上、岡山県立図書館所蔵)、「林の友」第8～41号(岡山県女子師範学校校友会・校友会、大正2～昭和13年)、「あやく」創刊号・第2号(岡山師範学校女子部、昭和22～23年。以上、岡山市立中央図書館所蔵)などがある。しかし戦時中には物資の統制などで、印刷物の発行もなく、この地に同居していた第二岡山高等女学校その他でも、ほとんど印刷・出版はされていないようであり、戦時中の様子を知りうる資料はかなり限られたものである。
- (2)本調査でお話をいただいた方は、昭和17年4月の入学生であるが、昭和18年4月からは学校令の改正に伴い、学校名称のほか、高等女学校や師範学校の修行年限などが変更された。ここでは当事者の経験を基に記載した。
- なお、本稿の表記の仕方としては、本来は各話者が語られたままの言葉を活字化して記載することが望ましいと考えられたが、かなり以前の記録であり、また話の手がかりとなる資料もほとんど無い中で、各種の具体的な記憶の文章は比較困難であつた。すなわち前話者の印象的な記憶が主となり、それらはかなり断片的なものとなっていたためである。聞き取りでは、質問事項に対して各自が記憶をたどり、たぐり寄せるように語っていただいたが、実際には、別の話者が発言(記憶)を修飾し、またそこから別の項の話へ飛んでいく、といった具合で、話されたままを文章化していくことは、記録としては適当でないと考えられた。そのため本稿では、証言された断片を項目ごとに再構成し、いまひとつ不十分と考えられる項目等については再度、証言をしていただき、再びそれを項目ごとに編集していく、という作業を行った。なお、項目ごとに話者も分けることも不可能ではないが、話者の共通した印象を記すという方針としたため、あえて話者を分ける表記はしなかった。
- (3)証言では、師範第一・部、第二部を、單に「一部」「二部」と言っていたが、本稿ではすべて「第一部」「第二部」と統一表記した。
- (4)国民学校高等科を指す。
- (5)併設の岡山県立女子青年学院教員養成所の入学試験は女師と併設できた。ここでは、羽織を継う試験があり、高等女学校で捨の着物を競っていたので出たが、女師よりも難しかったといふ。
- (6)女師では以前にも専攻科はあったが中断されており、官立となった昭和18年4月から再開された。女師卒業生のうち、希望者が学んだ。
- (7)幼稚園保母養成講習は1年間の課程で、大正11年4月～昭和18年12月まで17回開かれた(『岡山県教育史・統編』144頁)。
- (8)二女は、昭和11年4月に女師内に開校し、戦後の学制改革ののち、岡山県立岡山朝日高等女学校中山下校舎として昭和26年3月まで、この地に構えられていた(『岡山県立高等女学校の沿革』)。
- (9)青教は、大正13年4月に女師内に「岡山県立女子青年学院教員養成所」となった。学制改革によって昭和19年4月に倉敷市日吉町へ移転し、女師の施設の一部が空くこととなった(『岡山県教育史・統編』141～142頁)。
- (10)旧藩学正門には昭和17、18年當時も門衛がいたように思うという証言もある。
- (11)昭和7年の間に見られる教室配置は、各教室ごとに名前が付いているが、証言される昭和17・18年頃にはその多くが普通教室になり、特別教室はわずかとなっていたようである。これは二女や青教などが併設されたことで、女師にあった科目ごとの教室を減らしたものであろう。
- (12)証言では「縁のない」壁といわれるが、本稿に掲載した写真などには縁がみられる。部屋によっては、縁の有無があったのかもしれない。
- (13)当時の女師で使用された教科書やノートについて、政田民俗資料館に以下のものを所蔵している。
(収蔵資料番号03-34、分類番号C10-57。書名等の印字部分は新字体で示す。)
- ・竹野岩道『日本教育新教科書 学校管理法』中等学校教科書株式会社、昭和12年(収蔵品は昭和16年12月の改訂5版。「昭和16年12月16日師範学校教育科 文部省核定定」とある)
 - ・東洋圖書株式会社編集部編『礼法要項要義』東洋圖書株式会社、昭和16年
 - ・人権資料『公民作法』教育会叢書定書 帝国教育会出版社、昭和17年
 - ・文部省『師範団文學史』、師範学校教科書株式会社、昭和18年
 - ・筆記ノート『漢文帳』「二部一年/徳田堅子」
- 本科2年時(昭和18年度)
- ・乙竹岩道『日本教育新教科書 学校管理法』中等学校教科書株式会社、昭和12年(収蔵品は昭和16年12月の改訂5版。「昭和16年12月16日師範学校教育科 文部省核定定」とある)
 - ・東洋圖書株式会社編集部編『礼法要項要義』東洋圖書株式会社、昭和16年
 - ・人権資料『公民作法』教育会叢書定書 帝国教育会出版社、昭和17年
 - ・文部省『師範団文學史』、師範学校教科書株式会社、昭和18年
 - ・筆記ノート『管理法』(岡山師範学校/女師・部/本科二年二組/徳田堅子)
- いずれも今回語者としてご協力いただいた西原翠子氏の使用されたものを寄贈いただいているものである。なお、『公民作法』と『礼法要項要義』には表紙等に折り目がなく、使用された状態がみられない。配布はされたものの、授業では全く用いられることがなかったのであろう。
- (14)高女では、1～3年生の時(昭和13～15年度)には英語の授業があったが、4年生ではうやむやだったという。昭和14年度頃までに入学した女子第一部の生徒らは、英語を学習したかもしれない。
- (15)当時の二女生徒の記憶では「入学した当時は、師範の食堂に毎日お昼を食べに行きました」「入学したはじめから、食堂でお昼をいただいていました」。『岡山朝日高等女学校教育史資料 第2集』47頁。
- (16)昭和17年は1年生のみ、昭和18年は1年生、2年生で行ったという。昭和16年度の第二部生徒は、1、2年生ともに海水浴には行っていないという。行程は京橋(昭和30年代まで港であった)から「ボンボン船」に乗っていったという。
- (17)現在の岡山市美術の奥市公園西隣にあった岡山乗馬会の馬場をさす。写真43の奥には県道岡山牛窓線や、玉井宮のある山がみえる。
- (18)岡山師範学校男子部。校舎は現在の岡山市東山二丁目にある岡山大学教育学部附属中学校の位置にあった。
- (19)岡山県立第一岡山高等女学校。現在の県立播磨高等学校の位置。

- (20) 昭和17年4月18日のドゥーリトル空襲を指すものと考えられる。岡山では14時50分に警報が発令され、19日午後、21日午後にも出された。ただし、これが岡山で最初の空襲警報であったかは不明である。(日本銀行岡山支店「金融報告(昭和17年4月中)」『昭和17~18年金融報告 No.10』(岡山県立図書館蔵)
- (21) 昭和16年3月公布の「国民学校令」によって、当時小学校は「国民学校」と呼ばれていたが、ここでは著者の証言のとおりに小学校とする。
- (22) ヘチャ襟は、昭和15年3月に文部省が全国の中等学校生徒の制服の統一を始めて、翌年岡山県も全県統一制服に取り組んだもので、瀬戸萬女では昭和17年4月入学から全員ヘチャ襟の白カバーをつけた統一制服となり、スカートはヒダなし裾開きで、床丈約30センチになった(岡山県立鶴戸高等学校創立八十周年記念誌編集委員会編『創立八十周年誌』81頁)。
- (23) いわゆる「婦人標準服」といわれるものと考えられる。男子の「国民服」に対して、昭和18年頃に奨励された型と同様のものである。昭和18年6月4日閣議決定の「教諭衣装衣類標準化実施要綱」では「専門学校以上に学生生徒ノ制服ニ付テハ可及的婦人標準服ニ依ラシムルコト尚夏期ニテハ靴下ハ短靴下ヲ用ヒシムルモノトスルコト」としている。
- (24) 女師の昭和19年3月の卒業写真では、女師の旧制服、ヘチャ襟、「婦人標準服」混合である。旧制服は、第一部入学の生徒は、入学時に購入し所持していた可能性もあるが、その他の生徒については卒業生から受け取ったものか、自分たちで作ったものかは分からぬ。卒業式自体は、「婦人標準服」での参加で、左胸に「国民儀礼章」を付けてあった。「婦人標準服」については原生「新らしくできた婦人標準服」(『週報』第287号 昭和17年4月8日号、13~16頁)、「国民儀礼章」については『岡山県教育史・続編』191頁を参照した。
- (25) 色々や西大寺の萬女では、おかげの髪をした生徒はおらず、髪を後ろで二つに分けたものが、三つ編みはだめだったという。
- (26) 著者は、当時自宅で内職として縫物機で作った鞄糸も1巻50枚で売っていたという。そのため、縫物机の手伝いをする「これでお靴下が一つ買えた」と、一緒にやっていたお祖母さんに言われたという。
- (27) 現在の岡山大学津島キャンパス一番に歩兵第54連隊、工兵第10連隊などがおかれていた。衛門は5つあったと言われ、現在も山砲兵第2連隊の衛門などが残る。
- (28) 現在の岡山市宿にある陸上自衛隊三軒屋駐屯地。当時は陸軍兵器補給廠三軒屋部隊だった。
- (29) 部隊奉仕で、三軒屋でのボタン付け作業の有無に、異なる証言がある。別のクラスで行ったことで、作業内容が異なっているだろう。
- (30) 海軍衣糧庫。現在の岡山市伊福町の県立岡山工業高等学校的位置。
- (31) 現在の岡山市東田付近。この辺りは近世初頭の干拓地で、戦時中はまだ広大な水田地帯であった。
- (32) 現在の岡山市藤田・妹尾地区。近世～戰後にかけての広大な干拓地。
- (33) 発掘調査でも出土している、いわゆる「国民食器」。
- (34) 天満屋は現在の表町の天満屋、「お菓子町」は現在の表町三丁目付近の商店街をいう。いずれも女師からは片道約1キロ範囲内である。
- (35) 岡山赤十字病院。当時は女師から程近い岡山市丸の内にあった。
- (36) 昭和16年6月に女師の勤労奉仕で、御幸郡牧石村の麦刈りの手伝い中に出された生水を飲んだことで、生徒26人が腸チフスに罹り、生徒6名と生徒の親5名が死亡した。『岡山県教育史・続編』138頁。昭和17年度でも、女師寄宿舎では歟死態勢が収られていたという。
- (37) 当時は國民学校でも、男女別クラスで教える学校がほとんどだった。

聞き取り調査は、2007年6月27日に発掘現場および岡山市埋蔵文化財センターで、西崎聖子さん、山本操さん、西坂良子さん、池宗寿美子さんから伺い、同年11月17日、30日、12月19日には萩原民俗資料館で西崎さん、山本さんから伺った。また、本稿の旧軍関係の施設の位置や名称、岡山空襲関係等については、岡山空襲資料センターの日笠俊男氏に資料提供・教示をいただいた。

参照文献

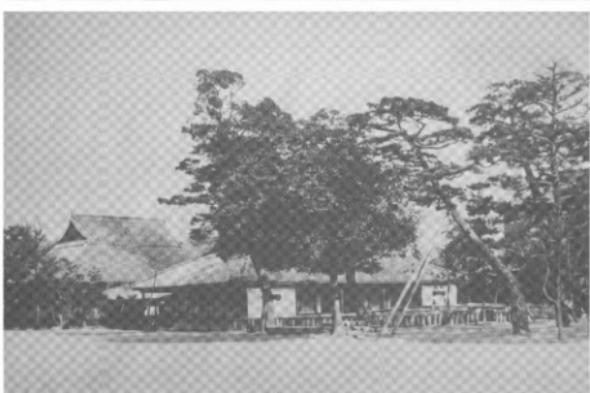
- 岡山市史編集委員会編『岡山市史 戰災復興編』岡山市役所、昭和35年
 小林久磨編『岡山県教育史 下巻』岡山県教育史刊行会、昭和36年
 岡山大学教育学部附属小学校編『附属小学校九十年史』昭和41年
 岡山市史編集委員会編『岡山市史 宗教・教育編』岡山市役所、昭和43年
 秋山和夫編『岡山の教育』岡山文庫48、日本文教出版、昭和47年
 『岡山県教育史・続編』岡山県教育広報協会、昭和49年
 岡山大学教育学部附属小学校同窓会百周年記念事業実行委員会編『百年のあゆみ』昭和51年
 太田進編『岡山朝日高等学校教育史資料 第2集』岡山朝日高等学校同窓資料室、昭和51年
 太田進編『岡山朝日高等学校教育史資料 第6集』岡山朝日高等学校同窓資料室、昭和54年
 岡山朝日高等学校同窓資料室編『岡山朝日高等学校創立110年』岡山県立岡山朝日高等学校、昭和59年
 岡山朝日高等学校校史編纂室編『岡山朝日高校の生い立ち、戦前篇』岡山県立岡山朝日高等学校、平成16年



調査範囲全景



かつての岡山藩藩学
(明治末年頃か)



第1次調査区から
天神山方面を望む

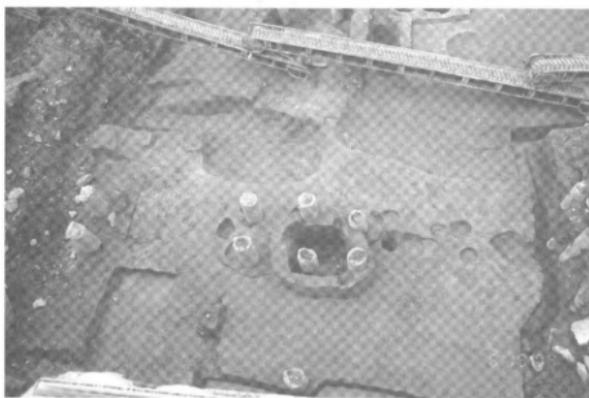




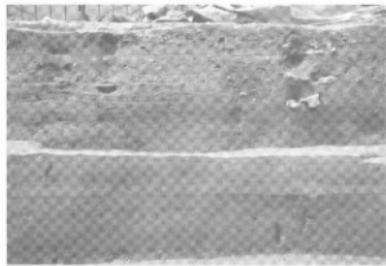
第1次調査区西部全景
(近世遺構面・西から)



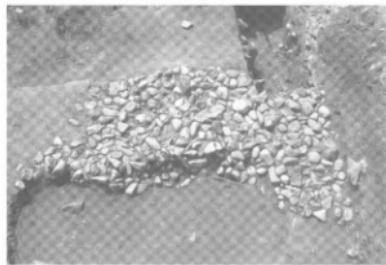
第1次調査区東部全景
(近世遺構面・西から)



第1次調査区東部全景
(近世遺構面・南から)



土層堆積状況(北壁)



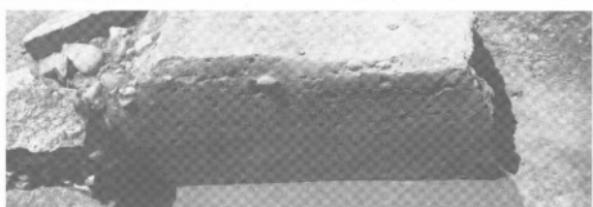
小石敷き遺構



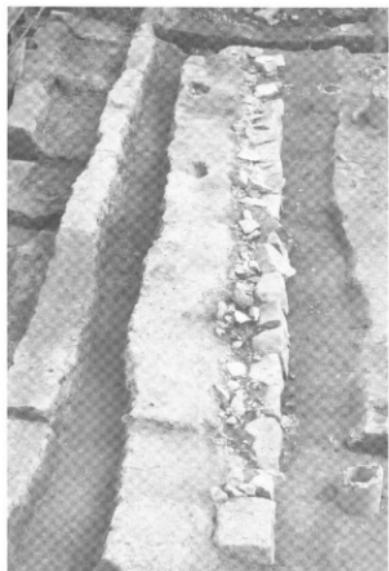
井戸3断面



道路遺構全景(西から)



道路断面(断面3)



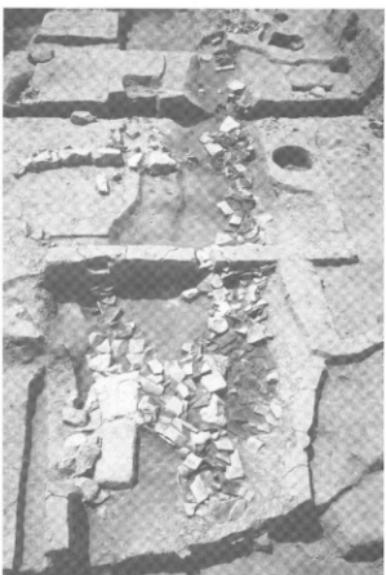
道路遺構全景(南から)



溝2 全景(西から)



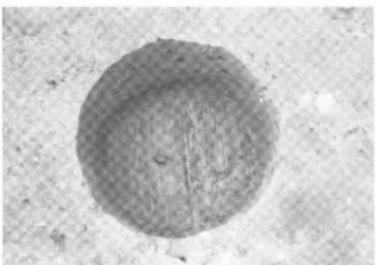
溝2 瓦等出土状況(東から)



溝2(東から)



構 3 と柱列(南から)



P28 桶検出状況



石組み桶状遺構



柱列と土坑群